

*

**

前線勤務について最初の頃、二人の男が勿論各々非常に異った意味で私を大いに助けてくれた。その一人は私の下にいた軍医下士官ラープであった。アウクスブルクの郵便局員で、彼が方言で話すのを聞いていると、私はいつもシュヴァーベンの友だちを想い出して何かなつかしい気持になった。私のひたむきな軍隊志望が一つとして悪い恥ずかしい結果を生まず、それよりも私が抑々自分の地位にとどまり得たということは、まさにこの賢明で信頼のおける人間のお蔭であった。サン・カンタン附近の部落エルコオ到着直後、私は見栄えのしない国民軍の軍医制服をきて師団軍医監の許に出頭した。襟には規定通りのアスクレピオスの蛇が二匹金で縫いつけてあるだけだった。尋ねられるがままに、塹壕に入ったこともないし、榴弾が頭上を唸って行くのを聞いたこともないと正直に答えると、軍医監は不機嫌になってしまった。彼は再び、私が大隊附軍医、軍医大尉として明記されている出動令状を手を取ったが、しかし、怒ってすぐに机の上にこれを投げ返した。彼は明かに、軍医局の局員たちが自分をなぐさみものにしたのだと信じていた。長い間脅かすような足どりで、部屋の中を往ったりきたりしていたが、その間に気も落ち着いたと見えて、私に話しかけてきた。しかし断乎たる口調で、お気の毒ではあるが、即刻以前のところまで引返して貰いたい、全然戦闘に経験のない同僚にこういう重大な部署を委ねるといふ責任は持てないから、と言うのであった。私はこの宣言を落着いて聴いた。それは殆ど鼓膜にも達しない位だった。自分が突き帰されるなどいふことは、一瞬間と雖も可能だとは思えなかったのである。逆に私は、職場ではこんな調子でものを言うものだろうかなどと思いついていた。けれども彼が実際に副官に命じて、私のアウクスブルク送還命令書を作らせ、また副官が冷やかにこれを書き始めた時、私は大いに驚いて、私がここにさしむけられてきたことですっかり侮辱されたように思い込んでいる軍医監に、鄭重ではあったが切実に、私が示す第一戦志望への喜びもとにかくいつかは何かの足しになるだろうし、残念ながらそれは既に国内では、恐らく閣下が信ぜられておられるほどは最早見られないものであるし、それに経験というものもどんな馬鹿者でも自分のものにすることが出来よう、私だって馬鹿者ではないのだから、などと色々に口説いた。彼は驚いて立ちどまり、かすれた声で一言もの言ったが、しかし非常に柔和な眼つきになった。----「君は意志旺[さか]んな人らしい」と彼は言った。私にとって情勢が有利に展開して行くことは、副官の態度から知ることが出来た。副官はペンを片づけ、紙をわきによせ、かすかに半ば事務的な笑いを浮べた。だがこの笑いはソナム地区から轟いてくる重砲の音で絶えず伴奏されていた。その響きは、たとえてみれば無数の穀粒が途方もなく広いたたきの上で砕かれているようだった。だが丁度私が喋り終って一寸沈黙が続いた時に、砲声は今までとは別になってきた。今まで絶え間なく聞えていた平らな轟々という大波のような音は、物凄く烈しいものになって行った。怖るべき炸裂が一つ一つ聴き分けられるようになっていった。秋の斜陽を浴びた医官室の窓ガラスは震動し始め、副官のインク壺までが音を立てて揺れた。二人の将校は互いに眼を交わした。それから二人とも私を見た。こういう轟音に出遭って、新参者の神経がどういう反応を呈するかを見ようとしたのだろう。私もそれと悟って、心中びくびくもので興奮していたが努めて平静を装った。あの向うの方のモールパにいる義兄の歩兵将校のことがまた思い出された。事情に暗い私には、彼がこの絶滅の騒乱中から生きて、いや健全な四肢を害[そこな]わずに帰れようとはどうしても思えなかった。姉のことを考えた。生れてからまだ二三ヶ月にもならぬ姉の男の子のことを考えた。世間の人たちが安固で不変だと考えていたもの一切が、永遠に失われて行ってしまふように思われた。だがその際、私が少しでも気臆れしたような風を見せると早速これが誤解されるのだということを一瞬も忘れなかった。そこで私は、こういう光景などはどんなものでも、もう厭になるほど退屈極まるものだと思っているようなふりをして、懸命に平気な顔つきをしていた。突然、命令でも下ったかのように完全な沈黙がやってきた。だがそれは、以前の荒々しい轟音よりも、ずっと胸苦しいものだった。----「どうしたのか、君、尋ねてくれたまえ！」と医団軍医監が副官に言った。副官は受話器を耳にあてた。

だが少しもはっきりした様子が判らない。するとまた軍医監は、蒼ざめて心配そうな顔を私の方に向けた。とにかく彼がそれから言ったことは、私も正当なこととして認めないわけには行かなかった。試験的に大隊勤務につかせようと思うが、もし私が少しでもぼろを出したら早速後送だというのである。

私は後になって、こういう冷淡なあしらいを受けたにも拘らず私がずっと確信を持ち続けたのは一層よいことだったと思った。というのは、連隊附の二三の軍医も、特に隣接諸大隊のまだろくに臨床試験も済んでいないような一番年若な野戦軍医補たちが、私の任官を不当なことと考え、私が勤務上の交際のしきたりなどを訊ねても妙に意地悪く教えてくれなかつたりすることがすぐに判ったからである。有難いことに将校連中には、私の同僚たちのようなそねみが少しもなかつた。連隊長のヤウト大佐は、重厚な田舎者で千軍万馬の軍人だったが、勲章も肩章も持たぬ私を一人前の軍医のように歓迎し御馳走してくれ、またその副官で、口辺にいたずら気のある明るいブロンドの、眼の澄んだゲオルク・ヴァーグナー中尉は、打解けた性質の人だったので、それに励まされて私も何かと今の自分の立場を打明けたりした。彼は、何でもいいからあの老ラープに頼るがよい、あれが必要なことを何でも教えてくれようからと実に有り難い助言をしてくれた。仕合せなことに、連隊はまだ二三週間活動せずにそのままの位置にとどまっていた。私は午後はきまって誰もいない営内病室で、この気立てのいいしっかり者のシュヴァーベン人と仲良く一緒に座っていた。自分の上官に教えるということは、明かにこの男を悦ばせたのである。しかし、エルコオのいかめしい閣下は、新しく部下となった新米の医官がまめに働くのを見て、不安がったり驚いたりしたらしい。彼は、野営、浴場、井戸、虱駆除施設、便所設備、防毒面などの状態に関する報告を次から次へと受取った。それらの報告書は、まずラープが草案を作り、それから私の手で立派なドイツ語に訂正されて極めて厳密に作成され、更に私があらんかぎりの力を揮って叮嚀に認めたものである。そうかと思うと今度は、塩化石灰、ナフリタン、サルチル酸粉末、薬剤、注射液、注射器、繃帯具などが請求され、各週の終りには、一点非の打ちどころのない復命報告書が送られるといった具合で、これは我々が東部戦線に送られ、すさまじい戦闘に出動する日まで続けられた。東部戦線では、忠実に頑張り通す者なら誰でも大歓迎であった。そしてのちに、私が冬のルーマニアの谷合で師団軍医監に出遭った時、それはもう古い戦友の邂逅のようなものであった。

当時私が受けたもう一方の、きわめて必要な援助は、どちらかといえば精神的な性質のものであった。私を助けてくれた当の本人が、恐らく今でもまだそれについては何事も知らないことであろう。到着した日のあくる朝、私はノワイヨン附近の陣地に出かけて行った。大佐は伝令を一人私につけてくれた。フランス軍の繫留気球から見られないところは、地上を歩き、発見される危険のあるところは地下の深い塹壕の中を進んだ。塹壕はカタコンベのように枝葉に分れて掘りめぐらされ、建物の建っていない土地の中を縦横に走っていた。朝の五時頃だったろう。暁の明星は小さな月のように、あせた薔薇色の棚雲の上に長いこと輝きながら懸かっていた。しかし我々の眼前には、遠くの方まで柔らかな灰色の朝霧がひろがっており、道が進むにつれて、黒々とした山々の頂がその朝霧の中からとび出してきた。それから山が見えなくなり、高いウルムやポプラ、アカシアの密生した茂みばかりになった。導標によって、我々の立っている地点がパリから僅か 90 キロであることが知れた。丁度アミイという部落を急いで通りすぎた時、黒馬に跨った一人の男に出会った。---- 「師団牧師殿がまた早くからお出かけです」とつれが言った。戦地にきてから出会った最初の僧職者だった。彼の制服は我々のむしろ緑がかったのよりも、ずっと灰色の勝った鼠だった。襟はしかし、丁度アミイの周囲の野原に咲いている美しい薊[あざみ]と同じ紫だが、ただいくらか深い。さてその顔のことだが、彼はたとえこんなに単調な風景の中になくとも、大勢の人間が集まっているようなところにいたとしても、そのきつきによって必ずや人目を惹かずにはいまいと思われるような顔だった。長目の線の鋭い面輪は、朝の光を浴びて黄色く碧白く、灰色の眼は深く窪んでいて、疲労の影がないわけではなかつたが、全体の様子には克己と威厳とがあふれており、善良な意志に全体が勇気づけられている上に明朗でのびやかなので、肉体的な疲労などは決してたやすく頭を擡[もた]げられそうにも見えなかつた。牧師は

その黒馬をとどめ、私が新しい大隊附軍医かどうかと訊ね身をかがめて握手をし、私の幸運を祈ってまた馬を駆って行った。彼が力強く信実の籠もった声で上品なシュヴァーベン方言を話したので、私は又ぞろアウクスブルクの友人たちを思い出したが、それは妙に私の注意を惹いたことだった。

かって幾つかの道の交叉する地点に立ったことのある人間だということをも物語っているような人相があるものだ。そしてその人がそれらの道のどれを撰んで先きへ進んで行くかに従って、その人全体が、大地に向うか、あるいは光に向うか、自ら形成されて行くのである。さてあの従軍僧のうちには、牧師的なものと兵士的なものとが結ばれ合っているのだった。それがあれほどまでに精神的・自然的形式を採った場合というものは、私にとっては初めてのものだった。そこには、どんなに厳しい制約をも守り通すということが、最早困難であり得ないような一箇の人間が感ぜられた。教父の名はルーベルト・マリアーといい、イエス教団の所属員だということは、案内人の兵士から聴き知ったが、たとえ彼がそういうことを私に聴かせてくれなかったとしても、イグナティウス・ロヨラを想起したことだったろう。ロヨラも亦やはり軍人だった。そして、パンプローナの重城で弾丸に脚を砕かれたのちに僧籍に入ったのである。つれの伝令兵は、この従軍僧の詳しい話を私にしてくれた時、何か非常にたのしそうであった。彼が語ったところによると、牧師はかなり健康を害しているのだが、野戦病院へなど行かず、そうかといって少しも身体をいたわろうとしないで、どんな仕事でも喜んで引受ける。だからまだ生きてるのが不思議な位であった。ソナムの戦闘などでは、戦闘員などよりもずっと危険に曝され、重砲弾が炸裂するような時も掩蓋[えんがい]に入ろうとせず、不死身のように到るところに瀕死の兵士を探しまわって慰めたという。

この話を聞いてからのちというもの、殊に生活様式の変った一つの現れとして残酷に私を襲ってくる不快の続く幾週間などには、いつもこの讚辞が頭にこびりついて離れなかった。ほどなく私が実際に軍務に堪えることが出来ないような具合に思えてきた。胃を悪くする、何を食べても吐気を催し、一種の赤痢が体の力を奪った。しかもその頃、私が同時に非常に強引な乗馬訓練を受けていただけに、そういうことはすべて一番悪い結果を惹き起した。ルーマニア山岳地方で野営した最初の頃、その上御丁寧に色々な筋肉の部分に猛烈な神経痛が加わった。一度にこれほど病気を背負い込むというのは、そう滅多に見られるものではなく、これを纏めて小さな論文を書いて見ても悪くないというほどだった。ひと想いに師団軍医監のところ野戦病院行きを志願して出ようかと、毎日新たに決心したりする。だがいざ決心しようと思う段取りになると、私はその都度、苦しさに屈服してしまうよりは、やはり一握りといってもいい位のアスピリンとオピウムの錠剤を一度に服用した。なぜといって、病気の医者などというものは、どう考えてみても戦場中で一番みじめな存在だからであった。しかし毒物によって苦痛が鎮められるのは、いつもただ二三時間位の間で、しかもその代りに胃を非常に弱らせてしまった。疑いもなくこれよりもっと永持ちのする療法は、満身の力をふりしぼって、人が噂しているよりもずっとひどい目に遇っていても、自分の仕事を僅かばかりも怠けようとなし、あの厳粛で落ち着いた従軍僧を考えてみることだった。私の絶望は彼という手本にしがみついた。ある程度まで無理やりに、眼に見えぬものから力を受けるように仕向けた。そうやって私は幾度か、辛い一日や夜を克服して行った。私たち二人はちよいちよい出会った。一度位は同じ天幕の中に眠ったこともあったろう。また連隊本部で昼食の卓を距てて向い合せに座ったこともあった。だが話はありふれた挨拶以上に出たことがなかった。彼の目の前に座っていると私はいつも少し固くなった。恐らく、いつもこっそりとその人のものを盗んでいるのに、無邪気そうに笑いながら御当人と話をする小泥棒のような気がしていたのだ。そしてある時、彼は私の憔悴した容子に気がついて何か言ってくれたことがあった。憔悴したといっても、彼のやつれ方に比較すれば、私の方がまだ依然としてましな位だった。そこで私は、いや何でもないと彼にはっきりと答えたのだが、その時自分の顔の赤くなったのがよく判った。とにかく私と彼との関係は、多くの非凡な人間との関係に似ていた。彼の磁力のような治癒力は、そのまじかにいる時よりも遠くの方にいる場合の方がよく利いてきた。それに結局のところ、我々は誰しも多少あの蜚に似ている。手にとれば、かぐろい羽蟲にすぎない。そして自由に大気の中を

飛んで行く時、美しい光を放つのである。よく私が兵士たちと話している時など、彼の精神が私をかすめて通りすぎる。もし彼が我々の属している部隊にいなかったならば、色々なものが遙かに堪え難くなっていたことだろうと、私は自分に言わざるを得なかった。

身体の故障に対しては、野戦病院で手に入る二三の単純な薬が次第に効果を現してきた。特に酒精とエーテルとで褐色の規那皮を煎じて作った古くから知られているエキスが効き目があった。身体の故障は、こんな風にして病人用の寝椅子も使わず休暇も貰わずに徐々に取除かれて行った。それどころか時が経つにつれて、私は昔健康だった時よりもずっと丈夫になってしまった。

マイア-教父は曾て一度も医者 of 私を煩わしたことがなかった。だが一度本当にそういうことが起った。しかしそれは師団全体にとっても運命的な時であった。1916年最後の日の一日前、すぐ我々の頭上のヴァダシュ山頂に堅固な陣地を構築しているロシア軍を撃退する命令が下った。観方の重砲陣地からは二時間に亘ってまず砲火が送られたが、敵の反撃は次第に強くなってきた。丁度その時、従卒が取り乱した顔附で、医団附従軍僧殿がスルタの谷間で脚に重傷を受けられて仆[たお]れておられると報告にきた。まだ息はあるが、死人同様の御容子だと言う。不思議なことに、この報せを受けてまず第一に頭にきたことは、聖イグナティウス・ロヨロも脚をやられたということであった。私は同郷のバイエルン生れの助手ドクター・ルーゲ軍医を伴ってヴァダシュ山の裾に急行した。その時の天気模様と景色とは、その後永く私の印象にとどまっていた。暖かい南風のために、灰色にとざされた空の下の大気は極端に透明になっていた。二箇所折れている梯子段のような滝が西の傾斜面にあったが、氷の端の方は真珠母のようにきらめきながら、融け始めていた。白い紙を切ってこしらえたような、色あせた羊歯[しだ]の間には、まだ花に似た小さな紫色茸が生えていた。人影のない谷間に入ろうというところで、鉄兜の男が一人我々の方に向かってきた。森に覆われたこの山岳地方では到るところに見うけられる灰色の羊飼の小屋の一つを指さして、負傷者はそこに運ばれていると教えてくれた。苔を一杯に生やしたその丸木小屋は、岩の隅々や裂け目に友軍の追撃砲や重砲が隠されている樅[もみ]の多い丘近くに立っていた。そこに向かって急いで行きながら、我々は右手にも左手にも、ロシア軍の榴弾が落下してくるのを見たが、口径の小さい砲のものらしく、大抵は不発のまま地面に突き刺さった。衛生中隊の看護卒が四人、我々と同時に反対の方向から一台の担架を持ってやはりその小屋に到着した。少し以前から教父が陣地をまわる時、お伴をすることになっていた一頭のスコットランド種の見事なシェパードが、頸に赤十字章をさげて、砲弾が飛んでくる度毎に脅えながら、とざされた戸の前を頼りない様子でうろうろしていた。小屋の中には、板敷の床もなかった。教父は地面直接に血の池の中に横たわっていた。マントを身体の上をかけ、顔や手は死人のように蒼ざめていたが、しかし不思議に子供のように若返って見えた。我々を迎えて笑いかけたその微笑も、はっきりとして落着いていて、決して死にかかっている者の微笑ではなかった。我々にもやっとこれならばという元気が出た。ドクター・ルーゲは、出血を止めた後に、もうどうにも出来ないように砕かれた下腿を見事に繃帯した。私がいつも驚嘆しているあの敬虔な献身を見せて仕事を続け、我々が身を置いている不気味な状況などは一向気にもとめていないらしい。敵が、この吹けば吹くとぶような小屋に一発喰わすというようなことは考えられなかったが、しかし何といても敵の目標は非常に近いところにあるらしく、この小屋だけを大目に見るといわれるはなかったわけである。今も猶盛んに榴弾が飛んできて、中には小屋のすぐ上を掠めるようにして唸って行き、地面は、次第に小屋に近くなってくる着弾のために揺れ方を増し震動を続け、断片が上の天井壁をぶち抜き、外では犬が一度凄いい吠え方をしたことも、認めぬわけには行かなかった。

小さな二つの覗き窓から見ると、斜面の中程のところをソシュテレク村の方に通ずる、比較的敵に発見されることの少ない小径が見られた。半ば自然の森によって、半ばは植林によって覆われている。我々がヴァダシュ山麓に陣地を占めて以来というもの、連絡はいつもこの道を通して行われていた。勿論完全に隠蔽されているわけではなかった。伝令兵のやってくるのが見えた。そちらに向かってごくゆっくりと、一人の兵が戦友に手

をとられながら手探りするように歩いて行く。片方の手では、ハンケチを押しあてて泣いているように、白く繻帯した眼をおさえているが、指の間からしたたるものは涙ではなく、赤い血だった。力なげに鼓動する教父の心臓を注射で強めようとしている間にも、私は何時なんどきこの丸木小屋と中にいる人間がふっとんでしまうかもしれないということをはっきり意識していた。子供の時分、嵐に遇って、雷が全く自分一人をねらって光っていると思ひ込んでしまう時、私は何か怯えるような耳鳴りを感じたものだが、今も突然そういう耳鳴りがし出した。それに向っては、もう防ごうと試みることも出来ないような死を承認することに対して、何物かが心の中で逆らっていた。我々は、外部から脅かす不意の破滅に対して、恐らく人生のあらゆる瞬間においては今とは違った仕方で臨んだことであろう。なぜなら、我々は移り変わり、時には明るく光を受け、時には暗い世界の中に立つ存在者であり、昨日の弾丸にあたる我々は、今日の弾丸にあたる我々と同じではないからである。危険な瞬間において、最初の頃の恐怖がすぎてしまっただけから私を支配したものは、不思議に運命というものを信じ、陶醉と紙一重をへだてた一種の気分であった。その気分に含まれていると、この世のどんな不安も恐怖も、その本当の姿であるところの一箇の無として感ぜられるのである。善悪さまざまの追憶の風景が浮び上ってきた。しかし受けた苦しみなどは全く意味を失ってしまい、又、他人に加えた苦しきも、最早以前のものではなかった。それを悔むことは不可能だった。それで結局、残ったものといえば、生の流動の、自ら浄め行く力がそれを至福な結合の中へと導いて行くであろうという清らかな信頼の念のみであった。戦争それ自体は、暫くの間妙に現実離れがしてしまい、影法師のような戦士たちが夢に似た戦いを続ける一種の火山島のように思われた。しかしそこから少しはなれたところには、見なれた日常の世界の生活を示すしっかりとした緑の岸辺が広がっているのだった。白い陶器製煖炉のある、私のミュンヘンの仕事部屋、紺地の絨毯の上に描かれた黄金色の唐草模様もはっきりと見分けることが出来、母親のそばに座っている小さな息子の姿が眼前に浮び上ってくる。クリスマスの休日をたのしみながら、手工に夢中になっているのだ。それも近頃では専ら、煙草の箱でこしらえた自動販売機に向けられている。上の方の穴に鍵を入れると、下から何か引き出せるようになってきているが、勿論入れた金の値打につり合うようなものはたまにしか出てこないのである。この紛れもない手工の才能を思い浮べると、その時は何か気が鎮まってきた。それは、息子が他日恐らくはどんな風にかして世間と戦って行けるだろうということに対する保証のようなものであった。

再度覗き小屋から外を窺うと、すぐ近くの小さな岩山の縁に閃光を認め、続いて煙と爆音が起った。成程あそこに友軍の迫撃砲が据えられてあるのだ。ロシア軍の標的はそれだったのだ。石の塁壁はなめらかで、鈍い赤味を帯びていた。昔ドナウの岸辺で我々の散歩の好ましい目標となった大きな花崗岩のベンチを思い出させた。どちらも、よく水をはじく色々な形をした岩石のように、殆ど雨風による侵蝕を受けていない。一年以前、ゲーテの論文『花崗岩について』を、一寸立ち寄った折冥想法の従兄に向かって讃め上げたことがあった。あの素晴らしい小文に対する私の感激は、彼の眼にはやや極端なものとして映ったのだ。彼は、もうあの論文は時代遅れがしていると言って、私を抑え、かたがたこう主張した。花崗岩の塊りなどという奴は、もしいつかダイナマイトでも爆破してしまわなければ、恐らくシーザーもボナパルトもゲーテも、その名の伝わらなくなってしまうような未来までも今のままでいることだろうと、非常に性質の異なったそういう領域を従兄のように混同してしまうことは、私にとって馬鹿気たことに思われた。私はそれに対して何とも答えなかったが、それから三日して、この原子の鉱石が無邪気な自分の息子の中に惹き起し得た全く違った思想や感情というものに出会って、一層心からたのしく感じた。九歳の子供に向かって地球の構造を説明し、花崗岩を目の前に置いておいて、この石は昔灼熱した液状の物質だったが、のち次第に冷却して、とうとう融けた粥か封蠟のように固まってしまったのだということをお話しようと試みるのは、事実かなり大胆な仕業であろう。これがどういう印象を子供に与えたかということは、すぐには表面に現れなかった。だがそういうことすべては、人間の生れ出るずっと以前に行われたことなのだとすることを耳にしたとき、子供は目を丸くして岩を眺め、しまいには自分の小さな手でその片をかき取ろうとした。で、それが出来なかったので子供は悲しそうだった。しかしその次に行った時にはハンマーを持って行った。そして、

今や褐色がかかった岩壁から大きな破片が一つ割れ飛んで、何とも美しい青色の、細かな顆粒状の断面が明るみに出て来た時の、子供の悦びようといったらなかった。子供はそこを手で覆ってみたり、手を引っ込めてみたりして、幾度も自分の眼が本当に見ているのかどうか確めた上で、遂にかけらをポケットに納[しま]い込み、だがまたじきにこれを取り出した。----「さあ僕、いいものを持ってぞ。この全世界とおんなじ位古いんだ。それから、あの青いところは、今までずっと暗いところにあったんだから、僕がそれを眼で見た最初の、一番初めの人なんだ！」新しい土地を発見したどんな発見者だって、あの時の子供ほど心から満足して自分の行為について語ることは出来なかったであろう。そういうことを思いだしてみると、世界の偉大な生命がまるで仮象のように消え失せてしまうひと時があるということを完全に忘れてしまった。突然、小屋のまわりがすっかり静かになったことに気がついた。敵の砲火は、谷合いの別の地点を掃射しているらしかった。それに又、その間に我々は傷ついた教父に、こんな貧弱な繃帯所で考えられるかぎりの、行届いた介抱をし終っていた。

教父は何事か話し始めた。けれども非常に声がかすかだったので、言っていることを聴きとるためには口のそばに耳を持って行かなければならなかった。教父が言ったことは、願いでも訴えでもなかった。彼はただ、自分のとめどない呻き声や唸り声を許して貰いたいと願うばかりだった。ところが、我々はそういうことを少しも認めなかったのだ。殆ど声を立てぬほどかぼそい声は、如何なる苦痛も如何なる不安も現していなかった。むしろそこには、秘かな歓呼の声さえ響いてくるように思えた。慰めたりすれば、却[かえっ]てこっちが恥ずかしい想いをしそうだった。血まみれにそこに横たわっている男は、この上もないみじめな状態の唯中であって、猶[なお]も自己自身に対する並々ならぬ克己の表情を崩さずにいた。彼の生活の中には何か計画的なものがあつた。現在の不幸にしても、確かに余程以前から一つの可能性として計算に入っていたのだ、しかも間違いなく不利益の側に入れられて考えられてはいなかったのだということが感ぜられた。まだ荒々しい衝動をもって生に執着している一人の人間と、自分の本能を精神的なものに変えてしまう諦念者との間の相違は、この時こそまさに一番明瞭に理解された。我々如き者がこの世を去る時には、必ずあとには何か全く割り切れぬもの、完全に仕上がっていないものが残るのであろうが、この男は、暗黒の中から呼び覚まされ、簡素に明るい線をもって現実となり、完全に解脱するところの、バッハのソナタのように軽やかに漂って行く。

さてしかし、我々医者にとって一番大切なことは、この美しい解脱を出来得るかぎりさきに延ばすことなのである。だからさしあたりの問題は、身体の血の半分も流してしまったこの男を大至急ソシュテレクまで後送することだった。しかし安全な山径は、大変な廻り道になろう。目的地に行き着くまでにはどうしても優に三時間はかかる。だがそれまでには、運ばれて行く負傷者は死人になってしまう。有難いことに大気がやや変ってきた。山頂に雲がかかり、湿って雪が降り出した。それに関連して、砲撃も次第に下火になってきた。衛生中隊の四人に相談してみると、彼等も敵は運搬を妨害するようなことはあるまいと言い、一番近道をして何の掩護もない谷合いを通って教父を運んで行ってもいいと言明した。彼等は教父を担架にのせ、白木綿の赤縞の布でくるみ、肩にかついで、軽々と足早に出発した。犬の嬉しがりようは大したものだった。犬は歓呼の声を挙げて人々の周囲を跳びはねた。脇腹に受けた傷をなめるのもそこそこという具合だった。ルーゲと私とは、急いで本体繃帯所に戻った。もうかなり永い間そこを留守にしていた。ものを食べたり、ほかの負傷者たちの面倒を見ている間に、うれしいことに綿雪は雨にまじえたみぞれの吹き降りに変った。恐らく従軍僧を傷つけたことのうちにも、不吉な前兆を見てとったらしい師団は、攻撃延期の決心をした。ロシア軍も最早活動しなかった。樅の枝で作った寝床で、我々は夕方に近い午後を眠った。マイア一教父が脚の切断によく堪えて、四リットルの食塩水の血管注射も終り、回復に向い出したということを知ったのは、その日の夕方だった。

*
**

最初の頃の戦乱のさ中に、私には再び子供の時分の一番昔の体験が色々と思い出されてきた。そして戦場で私はそういうものを二つ三つ書きとめておいた。戦時の騒々しさも、格別その仕事の妨げにはならなかった。ただわたしの医術上の仕事ばかりを要求して、内的生活はそっとしておいてくれる大きな厳格な秩序の中に組み入れられていると言うことは、随分永年の間、患者相手に月日を送った後の今となってはむしろ一箇の恩恵のように思われた。その上、私は医者だったから、何人をも殺す必要がないという特権を味わった。それが又、私の目に見えぬ身心の組織に良い影響を及ぼした。こうして私は、ウォーターラーの戦闘中悠々として自分の畑を耕していたという、あのフランダースの百姓をマスコットに撰んだ。当時、書物を読むことはごく稀だったし、又、カルパーテンで戦地郵便が二三週間とだえた時などは、私が携えている書物といえば、あとにもさきにもアルフレート・モンバートの『考える人』ただ一冊だった。非常に高く日常的な人間の営為の上に漂い響く、このある時は余りにも明るく、ある時は不思議に暗い文学は、私の手記の謙遜な企ての伴奏となった。いやむしろ、私がこの作品の伴奏だったのだ。丁度一人の歩行者が、大きな深く光を与えられた雲のあとを暫くは追って行くように。モンバートを真似るつもりもなく、私はしかし幾度も幾度も彼の領域の中に突き入ろうと試みた。そしてこの精神的な交渉は、私の散文に影響を与えずにはいなかった。屢々雲は私のすぐ近くまで垂れ下ってくるように見えた。すると昔から懐しんできた多くの概念がその雲の中に吸い込まれてしまうのを認めた。けれども私は、昔子供の時分に沼地の白い霧の中を歩いて行った時のように、何の不安もなく安心して足を進めて行った。ただ今は、あの腐食した樹の幹の一杯につまった袋を背負っている代りに、自分の新しい生活の重荷を担い、ただ地面ばかりでなく、現代の基底全体が足許に揺れ動くのを感じていたわけである。しかしあの時の、ピルスティングの灯のように、私は今子供の頃の明るい物象にしっかりと眼を向け、文学の響き鳴るエーテルの中を歩みながら、周囲の音を立てている絶滅の声に耳を傾けなかった。

私の持っているモンバートは、仮綴だったので、次第に頁がばらばらになってしまった。その一つづりなどは、露営の火に暖まりながら読んでいた時に下に落してしまった。特務曹長がこれに気づいて拾い上げ、内容を見ていたが頭をふって、一体これは何だと訊ねた。すんでのところまで本式に説明しようと思ったが、考え直して、これはほぼ二千年ばかり前に書かれた古代インドの詩篇で、サンスクリットからの翻訳だと答えた。ヴェルツブルクの製本屋だったこの無口の男は、そこでまた私に戻そうとしていたその一つづりを、うやうやしくもう一度手に取って、額に八の字を寄せて神秘の行を読み始めた。----「このサンスクリット屋たちは、これで中々の奴だったんですな」と遂に彼は言った。「わしらより世の中のことを沢山知っている。」私も賛成した。すると彼は、次の休暇には家へ帰った序[ついで]にこの本を羊皮紙か皮で仕立ててさし上げようと言い出した。ところが、それから三週間の後、彼はルンクル・マレ山で戦死してしまった。

何人も若い頃の私に似て、余りにもたやすく人生の中に引き込まれ、世間に出れば俗化し、自然の中ではしかし自分自身が殆ど植物と化してしまい、達観を欠くために自己自身の法則に従うよりも却て他人の法則に親しむが故に、精神的な道を歩み尽すことに骨を折る者は、私のように時折は何かモンバートの作品を、たとえば『燃ゆる者』とか『創造』あるいは『考える人』とか『アタイール星』などのようなものを繙[ひもと]いてみるがよい。初めのうちは、それらが何か秘教を詩の形で現したものだと思ふかもしれない。しかし彼の心が感受性に富む厳粛さを持っているならば、決して驚くにはあたらない。突然、永遠に向って一つの窓が開かれるような気持になることがあり得るのだ。その時彼は、我々がもと如何に自由な存在であるかを驚きながらに感ずるであろう。詩章、一つひとつの行、まるで狂人が大地に向って囁くような響きを持ったものがある。だがよく聴いていると、それらは、原始の東方的叡智の究極的表現なのである。

原始森の
はてしない鳥の声。
五度死して、また目覚めよ。
それでもまだ鳥の声がする。

だからこそ死は労苦に値せず。

お前の求めるものへの足しにはならぬ。
己は銀色の星辰の間に
おのれを山嶺の物想う頂きにしばりつけて、
疲れに襲われようと、
なおも高きにあるとするのだ。

わが暗き翼に過去をのせて、
荒海の上を、いざ、漂い往かむ。
汝をこの海に落さばや、と、
わが荒々しき眼、きらめく。----
---- その時、汝はうたい始む、
ああ、誰か汝を棄つべきぞ、この荒海の上。

中にはモンバートの作品を目して混沌だと呼ぶ者もある。尤も、混沌という言葉に昔のオルフィック教徒たちが考えていたような、古い高い意味を再び賦与するならば、そして混沌を世界エーテルの兄弟として承認するならば、この意見に賛成してもよい。なぜなら、あれほどに集約された力持つ詩人の言葉が輝き出でて、魂を震撼するばかりか、照明し新たなるホリゾンをもって圍繞するような詩句を生むのは、やはり実際靈妙な混沌の仕業だからである。だがなぜこの深遠で裕かな孤独な精神と結び合おうとする者が稀なのであろうか。恐らくそれは、彼が始原の存在から多くの現代人とは違った仕方で、この世界を受取っているからなのだ。我々の時代精神の眼は探索的で分析的であり、精密な顕微鏡的な眼であるが、一方モンバートはいつも遠近の時代や空間の万象を単純に巨大な象徴に集約し歌い聚[あつ]めるのである。一切の生暖かい快適さ、一切の刺戟と緊張、一切の親しみと不気味、一切の慣れ親しんだ現実の連関、彼は普通書物へと読者を引きつけるこういうものをすべて読者に与えようとしないのである。時には徐々に偉大なものが育成されて行く人間的なるもののかすかな、目立たぬ萌芽なども示そうとはしない。狭隘な市民的世界の中などよりも、山の頂き、大洋の上、物古りし神殿の廢墟などのうちにこそずっと落着いて住むことの出来るこの詩人に会うものは、ただ伝説や神話になることが出来るほどに充分成熟したものののみであるらしい。こうして彼は、無限なるものの新しい大きな戦慄を以て我々を幸福にすることによって、目覚めたる夢、解釈、英雄の面輪などを以て我々を幸福にすることによって、自己の職責を果たすのである。そういう風なもの、ぐるぐるまわる鏡の中におけるように、純粹な精神の眼がこれを見さえするならば、この大地がどれほど美しくあり得るかということを感じさせてくれるのである。

焼けつくような夏の盛り、ドナウの岸辺を歩いていると、草の生えていない地面に、白や青の胡蝶が群れていることがよくある。最近降った雨の名残りがそこにあるのだ。そして、そういう僅かばかりの水溜りに蝶はその渴きを癒やすのである。つい鼻さきには大河が淙々と流れている。時々鷗[かもめ]がやってきて、飛びながら河の水を呑んでいる。しかしこの沢山の水は、喉のかわいた白や青の蝶々たちにとっては、何の足しにもならないのだ。蝶がその水を呑もうとすれば、即ちそれは彼女等の死を意味するのである。多くの人間は、偉大な精神的な要素に対して、これと同じような危険のうちにあることを感じているのだ。丁度我々が燐を水の中に保存して火事の起らぬようにするのと同じに、彼等はそういう要素から遠ざかっていて、そういうものを一生涯のあいだ無智というもので覆ってしまうのである。だがもし我々が、あの特務曹長に対してしたように、これはもうずっと昔に書かれたものだという意見をつけ加えたならば、モンバートの英雄的な幻想に読み耽ったからといって害を受ける読者は一人もあるまい。そうだ、もしこれらの言葉が遠い昔から我々に伝えられてきたものであるならば、そういう道を敢て歩んで行こうとした果敢なる人間を、何人と雖も讚嘆するに違いない。

1916 年末の執拗な山岳戦の後に我々の前線地区は突然静穏に見舞われた。ロシア人たちは国内での出来事に熱中した。彼等は戦争のことを忘れてしまったようだった。私は司令部及び二箇中隊と共にルーマニアのジーベンビュルゲン国境地方のケレツデシュ河の、非常に狭い、森林に覆われた谷合いにとどまっていた。すっかり出来上った野営宿舎が我々を収容した。オーストリア人がこれを建てたことはよく判った。実に便利で快適に出来上っていたからである。壁には小さな棚まであり、彼等が徳用ストーブと呼んでいる立派な鉄製ストーブも、戦友想いから残して行ってくれた。我々は仙人然として、1917 年にかけての際限のない冬一杯をこの薄暗い山峡に過した。大抵の者は毎日カルタで暇を潰していた。だが私は、そういう暇潰しが私自身、私の秘かな目的にとってどんな禍を約束するものであるかにほどなく気づいた。というのは、司令官自身がカルタ好きなので、トランプをすることが何か勤務のようなものになりかねなかったからである。私はトランプ遊びを識らないと偽った。そして、教え込もうとするあらゆる試みに対しては、人がもう相手にしなくなるまで上手に白痴のふりをし続ける兵士のように振舞った。そこで今までになかったような自由を味い、書物を送らせ、ハンガリア語やイタリア語を学び、手記の稿を進めた。怠惰な大隊軍医だと思われなかったために、傍ら虱駆除法を発明したりした。虱は、当時我々を悩ましていた唯一の敵だった。しかし少々熱心の度をすごしたので、師団報告の中で賞讃を受けてしまった。

帰還の話はもう全く出なかった。私は今度の戦争を以前のもものと較べることもやめてしまった。休暇を待ち望んだ。時にはドイツ国内に起った悪い変化を耳にすることもあった。飢餓と悲惨な食物の時がやってきたのだ。だが家内の手紙には、何もそういうことは書いてない。それにかなり頻繁に送ってよこすビスケット類の上等なところから察するに、噂は根も葉もないものであることが知られた。量も大変あるので、戦友と分けて食べることが出来、時が経つにつれて、家内から品物がくることは一般に歓迎される嬉しい出来事となった。こういう有難い菓子類の原料が、どんな困難な道や迂路を通じて得られたものであるか、我々はただ大よろこびによることで、しかし呑気にこれをカルパーテンの峡谷で平らげていたのだが、これを識ったのは余程後になってからのことである。

不注意から時折、ロシア軍の斥候隊が我々の歩哨線にひっかかり、一人位の戦死者を残して行くようなことがあった。すると殆どいつもそのあくる日は、白旗を掲げ、洗面を作った軍使が現れ、そういう無情なやり口に苦情を申込んでくる。ある朝は、革命軍側のロシア将校が両軍の鉄条網の間で会見したいと申込んできた。当時としては前代未聞の申出である。ながいこと電話で交渉を重ねた挙句、師団がやっと許可を与えた。司令官は私をドイツ側の小人数の派遣員のうちに加えてくれた。私が諧謔をよくするからという理由で、ひっきりなしに雪の降る四月のある日だった。我々はかねて両軍によって会見場所と定められていた台地の方へゆっくりと森の丘を下りて行った。巻いた鉄条網の輪が、黒い荊[いばら]の冠のように雪に埋もれている。それはロシア軍のものとも言えるし、我が軍のものとも言える。実弾をこめた小銃を持った歩兵が、少し距離を置いて我々に随行した。私は、そんな相手を信用しないようなことをしては相手を怒らせはすまいかと言ったが、何か蒼ざめて興奮していた中尉は、ただ一寸微笑して私に答えたばかりだった。遂に褐色のマントにくるまったロシア人たちが近づいてきた。我々が手を差しのべている間に、彼等も護衛付きであることがわかった。尤も我々ほど大っぴらではない。叢[くさむら]のある岩のうしろに何か動いている。コーカサス風の帽子が見えたり、銃身が見えたりする。相手方が連れて来たユダヤ人の通訳はどんな話でも実に巧みに通訳してくれたが、とにかく会談がごくありふれた談話以上に出てはならぬということは、我々ドイツ側には初めから固く定められてあった。もとより我々は権能を持たぬ下級将校である。我々の任務は、ただ敵の士気を察知するにあったのだが、敵はこの任務を実にたやすく果たさせてくれた。多分この冒険でどうやら償いのついたのは私一人だったろう。それは、あの時代の姿として強く私の心を惹いた敵の指揮者のお蔭

だった。この強そうな男は、我々の考えからすれば決して将校らしくなかった。甲虫のような形をした帽章のついた軍帽をミュンヘン式に言えば一寸ごろつき風にあみだにかぶっている。その代りくすんだブロンドの額髪が眉と眉の間までも垂れ下り、碧い眼は荒々しい満足のためにきらきらしている。その他にもまだ何か特別なもの、一寸口では言えないようなものが私の注意を惹いた。それは、私がこれまでまだ何人にも感得したことのない死の気配である。よく私の母親を苦しめた人相見の才能などを自分に発見したことは一度だってなかったが、この若い男のそばにいと、この人間は近くの怖ろしい終末に向って急いでいるのではないかという予感がどうしても私を離さなかった。とにかく彼はありったけの煙草を私たちの手の中にあけてくれて、態度も一般にきわめて親切でしっかりしているので、自然と我々の方が如何にも愚図で如何にも打解けないように目立ってしまうのであった。だが我々にしてみれば、そういう風に胸襟を開いて見せるということはもとより決してそうたやすく出来はしなかった。なぜなら、相手が新しいロシアの大衆教理問答を空で覚えて述べ立てて、我々を味方に引き入れることを自分の明白な義務だと考えているのに、我々の方ではせいぜい相手を嘔き出さしてしまうようなことしか言い出せなかったからである。ロシア国民の中にあつて脅かされているように感ぜられる本当に偉大なものは、名状すべからざるものであった。口に出して言うことも出来るのだろうが、だが気をつけてそういうことはしない方がよかったのである。なぜならそれは僅かな識者にだけ意味を持ち得るようなものだったからである。こういう次第で、きっとその巨大漢は我々をひどく無口だと思ったことだろう。全世界に幸福を齎そうという彼の演説には、賛成することも反対することも出来なかった。そういう誘惑はあらゆるところに漂い、幾百万の人々がこれに耳を傾けていた。またとにかく彼は我々にとって是非とも平和が必要であることもよく承知していたし、その上恐らくは、どんな敗北すらも何物をも加え得ぬほどに巨大で形のないロシアに較べると、ドイツの方が余程傷きやすい国だということをも充分に感じていたのだ。もし精神的なものにも壊血病といったものがあるとすれば、他民族に較べてドイツ民族のうちにこそずっと多くの壊血病患者がいたことであろう。我々は血を流しやすく、傷口も容易にふさがろうとしない。だが誰によってその傷が与えられたかということは屢々すぐに忘れてしまうのも我々である。我々の心情には、組織を強固にし血液の凝固力を高めるような、カルシウムや硅酸のような元素が欠けているのだ。我々はいつでもそういうものを外国から輸入しなければならないのである。

雪の積もったケレツデシュ森の会談は半時間ばかり続いた。我々は沢山な煙草の贈物を悦び、鄭重に無理解な微笑を浮べて、明朝から早速砲兵の射撃を中止し、いつかロシア軍と同時刻に武器を捨てる決意がつくように戦友一同に対して説明して貰いたいというあの若い中尉の鄭重な申出を聴いていた。もしこれが一年も前だったら、こういう言い草は断乎たる優越感と共に拒絶されたことであろう。しかしその間色々なことが我々の不利に変わっていた。だから我々の若い指揮者が採った拒絶の態度は、我々の秘かな内部の不安を隠すには余りにも烈しく、余りにも興奮しすぎていた。しかし突然私には、この一場を真面目に受取るということが最早出来なくなってしまった。そして恐らくこれが外に現れたのだ。相手は訝し気に私を見て通訳を介して、私が将校かどうかと訊ねた。我々志願軍医は、当時相変らず上衣に肩章をつけていなかった。その上、マントをきてこなかったのは一行のうち私一人だった。相手は訳が判ったので、会話の調子が幾分くつろぎ、本当に打解けそうな気配になってきた。物怖ろしい巨大漢はドイツ軍医の列席に対して少しも文句をつける理由を持たなかった。彼は私がまるで中立者でもあるかのようにほほ笑みかけ、弟の身を心配する兄のような押しつけがましきで、他人の健康ばかり考えずに自分の身体も労[いた]わり、今度やってくる時にはもっと厚着をしてくるようにと願った。その時には自分たちの方でもサモワールを持ってきて、お茶を立てよう、だから我々の方でもラム酒を持ってきてくれるといい、そうしたら話も一層滑かに運ぶことだろうと言うのである。だが会見は、これが最初で最後だった。なぜなら既にその晩、面白くない結果が現れた。あの中尉は、いわば全ロシア前線部隊の名の下に我々と話をしたのだが、隣接諸中隊が自分の中隊と全然意見を異にしていたことを、賢明にも黙っていたのである。そしてその日の午後、ドイツ陣地で賓客として接待された大勢のロシア歩兵が、夕刻再び敵陣の方に帰された時、武器を持たずにロシア兵を案

内していった味方の兵のうち、二三の者は再び帰ってはこなかった。脱走の嫌疑は、その時捕虜になった一人がガリシアのストリュイで逃亡に成功した時に晴れることになった。自分たちはあの時、敵の他の部隊の者に呼びとめられて捕虜となったが、待遇は悪くなかったと早速に報告した。

こういう種類の接近策は、その後の数ヶ月間、全線に互って行われた。そのために情勢が変るようなことはなかったが、軍の弛緩を将来した。私のことを言うならば、あの会見は私自身の歩んで行こうとする方向に一つの衝撃を与えてくれたにすぎなかった。あのロシア士官の態度からは、大地をくるんで燃え上る真紅の焔のように、新時代というものが吹きつけてきた。既成物への絶縁と叛乱の解放とを呼び求める声を、私は初めて、印刷された文字から読み知ったばかりでなく、人の口から人の口へと、自己自身を主張する生ける声として聴き知ったわけである。それからまだ我々に恵まれた静かな幾週間かの暇な時間は、全部手記の稿を進めるのに捧げられたということ以外には、私の返答はあり得よう筈もなかった。私が生命を吹き込もうとした夢想の小世界は、それ自らの法則に従って、孵[かえ]し始められた卵のように成長して行った。育つにつれて、それは益々容易に担われるようになって行った。手記に描き出された世界は優しく無邪気だったが、決してそれは神経過敏な世界ではなかった。戦争がこれを損[そこな]うことがなかったように、世界革命の焔の息吹きさえも、この世界には良い作用を及ぼすように見えた。

**

戦線が静穏になるにつれて、それだけ一層一種神経過敏症が我々の間に蔓延した。魔法の草でも食べたみたいに、話の間に険しい調子がまじる。安眠も得られない。悪夢にうなされる。命令を受けた者はまず自分の仲間の前でこういう命令はとても実行不可能だと宣言し、命令を授けた上官に向っては、自分にもそろそろ休暇が与えられそうだといい張る。局外者は、そういう発作を見て、我々を叛乱軍だと思い込んだかもしれないが、それはしかし非常な間違いなのだ。実際ただそれは、生活上の刺戟というものが全く欠けているのに怒って荒れ狂おうとする一種の神経衰弱症にすぎなかったのだ。だから一度爆発してしまえば、あとはもう万事が順調に進んだ。以前の軍律がまた戻ってくる。実行不可能だと言われた命令も、この上なく良心的に完遂[かんすい]される。恐らく、我々の異常な状態の持つ特別の価値を感じ、それに試練の意味を与えたのは、私ただ一人だったろう。とにかく戦争前の歳月に、世間から離れてこういう原始世界の風景のうちになりたいというのが、私の無情の希望だったということ私はずっと考えていた。

オーストリアの工兵は、ピーリツツケ山頂まで楽に歩いて行けるように丸太を埋めた道をこしらえておいてくれた。ある雲のない日、私は食後その道を登って行った。南側の斜面にはもう春の気配が感ぜられる。色ざめた大地の上には、獣の糞と、棄てられたかたつむりの殻の間に茶色の肺疾草の蕾が赤鉛筆のような頭を擡げている。小川の、氷の張っていない箇所には、白い花糸をもった緑の花のついた厚くて葉の大きい植物が生え、小さな沼みたいところには、蛙の卵の色の黒い塊りが漂っていた。しかし一時間ばかり後、北側を廻ってみると、そこはまだ冬の真最中だった。裸の樹には、氷やつららが下っていて、かすかな風に揺られて、日本の風鈴のような響きを立てていた。近道をするために、ずっとオーストリアの塹壕の後に沿って通じている丸太の道を捨てて、樅の森の中を一直線に登って行った。その地面には雪がふっているというよりも、むしろ雪が降りているというようだった。が突然、私は自分にも判らず足を止めた。丁度人の話の中に含まれた悪意に後になってやっと気がつくように、凍てついた地面を歩いて行くうち、左足が何か地面をは違ったものの上を踏んだということが、徐々に意識に上ってきた。後を振り返ってみると、二つの小さな土が盛り上がった間に一箇所だけその他の暗緑色の苔の部分から褐色にもれ上っているところを発見した。近づく紋章を打出した真鍮ボタンが三つ見え、そこにはいい加減に埋葬された兵士の死体が横たわっていたのである。霜の置いた軍服の上には、私の靴跡がはっきりと印されてある。足は丁度死者の心臓部の上を踏んだのだ。頭や両足にあたる部分には、土や石くれや粗朶[そだ]

が積まれて低くもり上っていて、その上には苔の板がかぶせてある。胴体に土をかける暇がなかったものと見える。

死人の脇ポケットから小さな書物の縁が覗いていた。書物はまだそう傷んでいない。青地には、花や櫛の葉や、一角獣や武装した紋章風の鳩などの金箔で描かれた模様がまだはっきりと見分けられた。第二頁には、大きな赤い復活祭の卵が一つ、真直ぐに立っており、その左肩のところには冠を戴いた青銅色のロマノフ王家の紋章と、1916年という年号が書いてある。次の幾頁かには、金地に真紅で描かれた古代ロシアの聖者像の小さな模写があったが、色は鈍い灰色に変っていた。それから、露帝と皇后が子供たちと一緒にいるところの写真があり、物憂い眼つきの王家出の尼僧の肖像が掲げられていた。赤く印刷された文字にかこまれた一枚の絵があった。その絵には黒々とした兵士の行列が旗手の後に従って、暗い山々に向かって進軍していくところが描かれている。しかし空の部分は明るい雲の冠で満たされている。それからその真中には、化物のように翼の生えた馬に跨って、恐らく聖ミカエルと思われる守護天使が前方を指さしながら進んで行くところが写されている。私はこの小さな曆を記念のために貰って、紙入れの中に納めた。確かに二三十銭の安物に違いない。けれども、私には読むことの出来ぬ文章の綴られた一つひとつの文字、装飾図案のどの線も、偉大なるロシアの魂の敬虔にしっかりとした生活を証拠立てていた。そうして、異国の、東方に遠く走っていても深く生命の通っている形態の世界のかすかな息吹きは、非常に強くそこに現れているので、曆に見られるような近代写真技術すらも、この世界の息吹きを妨げ得ないのであった。塹壕に降りて行く途すがら、明るい冬の陽ざしの下のカルパーテンの山々をはるばると見渡した。大抵の山はまだ雪を戴いている。その中にただ一つだけ、南に延びた山なみが緑色に黒くなっていて、ただ尾根のところだけは留金を打ったように白銀を鏤[ちりば]め、そこからは白い肋骨が下に走りそれがまた再び小径で結び合されている。その遙か上に新月が碧空の中に細い黄金の割れ目を作って懸かっている半時間ばかりシャベルを借りようと思ったオーストリアの歩兵は、一緒に行って、埋葬の手伝いをしようと言ってくれたが、少し暗くなってからにしようという。あの場所はロシア兵からまる見えだから、と言ってきかない。

帰途、ハイラー中尉の掩蔽部が近所だったことを思い出し、話をしたり歓待が受けられたりすると思っただけ嬉しかった。優秀な中隊長は着心地のよさそうな青のリテヴカを着込んで、それによってこの全線の平和がまだ当分続くことを保証していた。黄色い蠟燭の光に照らされた机の上には、一山の書類が積まれている。考えに耽って、ペン軸を弄んでいるところだった。「いいところでした」と彼は、二人が向い合せに座った時に、こう言いながら私が初め伝令兵だと思っていた一人の兵を指し示した。しかしこの兵には特別の事情があった。---- 「まだ覚えておいでですか？とにかく話の前半分は、あなたが我々のところにこられる前のことですから。」こう言って彼は一枚の、何事か書き込まれた紙を渡してよこした。それによると、この小柄な上等兵はペロンヌに近くフランスの戦場で、突撃最中戦列を離れて、その後数週間を経てフランダースのどこかで憔悴した半狂乱の状態で見られたのだそうである。そんなことも耳にしたし、直接この若者を二三度見かけたことがあるのを思い出した。彼は色々物を訊ねられながら、放心状態で突っ立っていた。その細面の顔は、塹壕部屋の薄暗がりの中に白く浮んで見えた。思わず私は二基の蠟燭を男に少し近よせた。すると私は、彼の女のように優しいがどことなくもの悲しい眼で静かに見られているのを感じた。軍服はもう着古されていたが、そこに縫いつけてある黒色と明青色の縞のある白の名誉賞リボンが真新しく輝いていた。書類には更に、彼がその最後の日までは優秀な兵であったばかりか、度々危険な斥候志願をしたことなどが記載されていた。中隊長は直ちに精神錯乱の場合を考え、私の前任軍医の手を通じて野戦病院に移したのである。彼はそこで二三週間正直に監視を受けた。しかし態度が全く温順であったし、肉体的な苦痛を訴えるというようなこともなかった。二三行好意的な文句の記された書類と共に原隊に帰されたのである。当時既に報告が提出されていたかどうかは知らない。事件の少ない数週間がやってきた。鉄道輸送、進軍、待機状態がこれに続いた。遂に大隊は再び行動を起した。すると直ちに発作の再発があった。上等兵は姿を消し、一週間後初めてマデファルヴァ戦線後方で

捕われた。その時の状態から察するに、彼はその一週間というもの、殆ど碌に食物も食わず眠りもせずにはいたらしい。そこまでは一切が文書によって明らかであった。その他のことは、注意の簡単な二三の言葉によって大凡[おおよそ]察することが出来た。二度目の逃亡後、この若者は精神の平衡を根本から失っていて、恐らくただ療養所においてのみ期待出来るような新しい精神的な栄養を必要としていることが立証された。しかし特に中尉が希望していることは、この男を中隊から遠ざけたいということだった。というのは、舞踏病がそれを見た者に感染して行くように、脱走癖は他の者に伝播する懼れがあったからである。私にはこの場合適当な処置を講ずることがきわめて容易であるように思われた。しかしハイラーは種々の難点を挙げた。師団軍法会議によって審議されるまでには、余程手間取るし、又それまでの間はこの男が中隊にとどまっていることになる。即ち高官の将校連は中尉ほどには伝染の危険を怖れていないのである。彼等の頭痛の種は、兵員の不足がかなり目立ってきたことだった。それで彼等の意見によれば、丁度完全な歯列が問題になるならば、ぐらついている歯でも、それが抜けてしまっているよりはあった方がやはりましだということと同じように、頼りにならぬ兵隊でもとにかく中隊所属員の一人に数えられるのであった。だから当時たまたに見受けられた僅かばかりの脱營兵に拘禁刑を以て臨むということは余り行われなかった。兵の方でむしろこれを歓迎するということが判っていたので、却[かえっ]て彼等に反省と自重の機会を与えた。すると又、実際この方法が誰にも功を奏した。そこで以前の過失は水に流すというようにしていたのである。善良なハイラー中尉は、自分の苦勞の種であるこの上等兵が前の発作の時よりも、これからさきの発作の時にもっとしっかりしているだろうという希望は持っていないらしく見えた。彼はそれだけ一層、部隊の団結に一抔の暗影を投げかける不気味な事件を繰返させまいと堅く決心していたのである。ただこの男を害[そこな]わぬような処置を発見することが問題だった。これには言うまでもないことだったが、軍医の証明が、即ち到底審議などの余地のないように明白で納得の行く証明が必要だった。なぜなら、もしこの哀れな人間がいつか軍法会議にかけられ、彼のことを少しも詳しく知らぬ人々の間を引きまわされ、ひどく取扱われ、その行動がただ戦時軍法の条文に照らして論判されることになったら、たとえ美しい名誉章リボンを持っていたにしても、彼にとっては本当の受難の道が開かれることになるのだ。この異常な人間的な場合に接して、一体何物がこれほど私を感動させたのか、そして自分自身を弁明する証明書でも書かねばならぬように私を動かしたのか、即座には呑み込めなかった。既にして自ら本文は頭の中ですらすらと出来上って行った。そしてハイラーが私に思うがまま何かと被告に質問してもよいと許してくれた時も、私にはそれが不必要に思われた。重要なことはもうみんな判っているように考えられた。けれども何か言うために、中隊がまた山に突撃でもするようなことがあったら一緒にやるかと、単刀直入に訊ねてみた。しかし私はいわば何もない虚空に向ってものを訊ねたのに等しかった。上等兵は鋭敏すぎる位の注意深さで聴いていたが、私の言ったことをつかもうと苦しみもがいているように見えた。長いことかかって、遂に彼は私を見ないで蠟燭の光を観ながらやっとうこう答えた。「歩兵は服従しなければなりません。それは当たり前であります。」----「でも駄目でしょう。」彼は一寸間をおいておずおずとつけ足した。私は、何故だと訊ねかえした。すると彼は黙って暫く地面を見つめていたが、かがみ込んで私が落した手袋を拾い上げた。----「以前は君も立派な男だったんだろう？」----「ええ、そりゃ、以前は----」まるで自分が生れてくる前の話でもあるかのように微笑するのであった。私はあくる日、野営病室に出頭するように命じた。それから私が一人でいると思われるような時間を指定した。これが終ってから、私は帰途についた。これからも度々ハイラー中尉を訪ねようと思った。この背丈の高い悠然たる男は、あの頃我々すべてが多少に拘らず悩んでいた過度の神経衰弱症に罹らないでいた殆ど唯一の人間であるように思われた。品物の欠乏がこの上もない時でも、訪ねてくる者には必ず少なくとも一杯の茶と一片のパンを振舞うのも彼であったが、どんなに危険な状態にあっても従容として迫らぬのも彼であった。又、どういうところで彼と出会っても、我々は常に彼の背後に、懐かしいミュンヘンの緑色の丸屋根を持ったフラウエン・トゥルムのどっしりした力を感じるのであった。

まだ恵まれていた無事平穩な余暇に、私の人に知られぬ覚書は次第に満たされて行った。ルンクル・マレで戦死した南フランケン出の若い兵士の、光を後に遺す姿は、半ば

詩のような文章をいくつか私に授けてくれた。その文章がもとになって、後年私の『ルーマニア日記』が出来上ったのである。尤もそれらの言葉は、『日記』も終り近くなってから出てくるのである。更にそれに結びついて、後に小冊子『復活祭[オステルン]』の中に集められた詩の多くが完成した。しかし試作も散文に綴ることも、脱走兵に対する意見書を草することほどに私を夢中にさせなかった。創作上の努力と医者としての努力を好んで混同しとりちがえるという私の若い頃の欠点は、まだ十分に克服されてはいなかったが、それでも今、この欠点は私自身にとっても、あの小柄な上等兵にとっても、有利に展開してきたのである。私はただ、意見書が被告に対する私の理解を余り甚しく物語らぬように心を配りさえすればよかった。とにかく私はその後二度と彼に出頭を命じなかった。彼は自分自身のことを余りにも知らなさすぎたし、自ら好むがままに一つの彼の姿を描き出そうとする私の空想の妨げになるだけだったからである。結局私の描き出した彼の姿はきわめて真実に近いものに見えたのであるが、それは恐らく、自分自身の中に秩序を持たず、既にそれだけの理由から他人よりも一層人間の内的障害に対して敏感だった制作者の心的状態のお蔭だったのであろう。恰も他人の危険が、筆者自身の精神が幾年となく歩んできた色々の危険な道に対して筆者の眼を開いてくれたかのような観があった。芸術家が形を与えて行く物によって、知らず識らずのうちに逆に芸術家自身が形造られて行くのと同じように、今や意見書の筆者は、あの上等兵の心を究[きわ]めようとし、彼のために意見書を認めることによって、大いに自分自身を益したのであった。

途方もない無能力は、途方もない業績に劣らず神秘的なものである。そのどちらにも一つの魔神が隠れている。兵役を逃れようと目論む兵隊というものはいつでもどこにもいるものである。あの場合はそんなことが問題なわけではなかった。我々は戦士であることを何人に対しても強制はし得ない。戦場における死、あるいは殺戮を恐れ、そしてただ充分なだけの賢明な忍耐力を養った者は、恐らく時が経つにつれて危険なきものへの道を見出すであろう。我々の上等兵はこういう種類の人間ではなかった。彼は幾度かの戦闘で男子の本分を示し、進んで危地に赴き、ある一定の時までは常に勇敢で沈着だった。---- と、その時世界の恐怖が襲いかかってきたのである。あの時彼は何を見たのであろうか。どういう呪縛が彼をただ一衝きに日常的な諸同じの拘束からつき出してしまったのであろうか。夏の日などに刻々変っていく雲の形を眺めていると、突然まざまざと巨大な人の顔のような雲の形を発見することがある。それは自分以外の者には判らないのだ。それと同じように、あの男が戦場の唯中を彷徨した時には前後二回に互って、ただ彼の心にだけ判って、しかもこれを言い現すに言葉の見当らぬような何物かに彼は出会ったのである。そういう時病気だと申し出たり、策を弄する暇などありはしない。彼は行かねばならぬ。今までに成し遂げたこと一切をふり捨てねばならぬ。熟考することもなく、眠りもなく、食物もなく、日に夜をついで彼が曾てそこからやってきた方向に向かって行かねばならぬ。そして遂にどこかで折れ崩れたのである。私の予感の描き出した精神錯乱の上等兵の運命とはおよそこういうものだった。しかし、外的な戦争や外的な平和の彼方で、生涯のある時期に何かこれと似たようなことが起り得ないと誰が確言出来るようか。そして、現実に対する完全な無能力ということの意味は一体何であろうか。確かに各人にとってその意味は同じものではない。ある人にとっては、恐らく混迷であり没落であろう。またある人にとっては、ひょっとすると、発見することであり、賢者たちの語る聖なる始原への一つの途であるかもしれないのである。

意見書の第一の草稿が完成した時、それはノート一冊を一杯に埋めていた。師団司令部に提出するより、むしろどこかの哲学雑誌にふさわしいようなものであった。この草稿は手許にとどめておいて、脱走兵に関するよりもむしろ私自身に関する部分をすべて抹殺することによって慎重にこれを抜萃し、遂に全体を三頁につづめ、その中に重要なことをすべて簡潔に判りやすく述べた。中尉は注意深くそれを読んで、ただ一言「結構です」と言った。それ以外は何も言わなかった。結果はきわめて迅速で喜ぶべきものだった。どうか私の書く他のものも、こうであってくれればよいと願いたいほどであった。軍法会議は告訴を却下し、男は国に送り返され、有能な医師の手に委ねられた。

その間、ピーリッツケ山の死んだロシア人が、時々私の夢の中に姿を現した。ある時は私の父によく似ていたが、とても見すばらしい身なりで、金を少しくれ、そうでないとお墓の代が払えないからと言う。---- 「その位のことなら」と私は答えて、地面に白墨で輪を一つ書き始めた。するとそのまわりには、世界各国からの使臣が、目立たぬ灰色の服を着て立ち並び、金貨銀貨を一杯に持った両手を差しのべている。みんなは、輪が出来上るのを待っている。出来上ったら、その中に金を全部投げ入れようというのだ。だがよく夢の中で不可能なことが造作もなく出来上るように、その時の夢では造作もなくやれそうなことが中々出来なかった。どうしても輪が書けない。すると突然そこに母が立っていて、死人の腕を抑[おさ]え、慰める。「静かにお墓の中に入っていられっしやい！もうじきに小銭でお代が払えますからね。」死人は微笑して、満足して行ってしまった。夢から醒めた時、ロシアの暦のことを思い出した。もし母がまだ生きていたならば、私が夢からののがれることが出来るように、時を移さず小さな暦を持って山に出かけて、その持主に返すがいいと言ってくれたことだろう。私もすぐその日もそうしようと思った。ところが沢山の病人が殺到して、一人で散歩する時間などはもうなくなってしまった。それにほどなく、この敬虔な志を忘れてしまった。しかしそれは秘かにその後も働きつづけていた。

鉛筆の覚書の中から、アウクスブルクで書き始めたが、その後放棄していた詩で、『聖者の手の上にある小さな市[まち]の子供の夢』というのが出てきた。そして、まるで異国の山から助けがやってきたかのように、いま突然、一所懸命になって求めあぐんでいた結末の詩句が実にたやすく出来上った。

けれども彼女は小さな市[まち]に自分の名を与え、
それからやさしい身ぶりでこの市を
貴重な種子のように私の中にしずめた。
そして私を果実や葉や土で埋めた。
私は永い間、もの悲しい冷却の中に横たわり、
けれども丁度黒いガラス板を通して見るように
暗い姿の女神が監視に立っているのを見た。
突然、私の弱いからだから市が聳え立ち、
偉大なる現実となって行った。
初めは雲のすがたに似て弱々しく変りやすかったけれど、
天使が四方から飛び集まってきて、
一切をしっかりと本物に愛らしくしてくれた。
すると歌声がわき上った。「悦べよ、おお、少年よ、
我ら汝の黄金の市を築くを助けむ。
されど汝、我らに何を礼とするや？」
その時、私は立ち上り、自信に燃えて、
淋しい斜面を下り、ドームに駆け戻った。
すると母が正面玄関の前に立っていて、
緑の小枝を私に授け
私を復活祭の食卓へ連れて行った。

我々にとって血なまぐさい戦魔が次第に伝説のようになって行こうとした時、突如として彼は我々を思い出し、我々を谷間の隠れ家からひきずり出し、まずルーマニアのファルチュアヌ山に向わしめ、そこから更に東ガリシアを通過してブコヴィナに連れ行き、次に西の方、フランダースと北フランスへと駆りやった。そこでは、1918年の荒廃した春を迎えて、ルーデンドルフが、出来ることならこの期に敵の包囲を打破り、カレエを奪取し、そうして全戦局に大きな展開を与えようという目的の下に、全砲火、全軍勢を悉く集中していたのである。

**

一度、東の方のブコヴィナで、意外な状況の下に一人の詩人と出会うこととなった。それは戦争という異常な生活の中でしか恐らく考えられぬような、予感と内省とに溢れた不思議な日々の日であった。チェルノヴィツに近いブダ・マハラマハラの村落に休養營舎を定めた時のことである。私は昼食後、小さな農家の簡単な装飾を刻み入れた粗野な机に向って座り、初めてルードルフ・アレクサンダー・シュレーダーの見事な翻訳を読んでいた。見すばらしい部屋の、幾度も粘土を塗り重ねた四囲の壁は穴だらけで、亀裂が一杯だった。けれどもお客への心づくしの新鮮な草花が、その割れ目の一つにさし込んであった。黄色い百日草と青い鳥頭とりかぶとだった。時々、薔薇色の頸飾りをした子豚が一匹、部屋の中に入ってきて、私の靴を嗅ぎまわる。するとすぐに家の小さなブロンドの娘が葉のついた小枝を振ってこれをまた追い出す。泥壁の家は脊せが低くて、四方からこの小屋を緑に取り巻いている丈の高い黍きびとすれずれの高さだった。けれどもこの家には、何か特別の趣きが具わっているように思えた。たった一つの戸口の左右にあって、覆いかぶさる藁屋根を支えた二本の、白いペンキを塗った丸い柱は、柱頭に飾りがあって、何かイオニア風の柱を想わせた。その他にも、古代の輝きが仄ほの見えるようなことがあった。母親が熱のある男の子を連れて、診て貰いにやってきた。名前を訊ねるとオレステスというのだった。その後ほどなくして、かねてから知合いの中隊長が、この家を写真に撮るためにやってきた。百姓の主人夫妻は、写真をうつすのだということが判ると、大急ぎで、美しい刺繍のある晴着を着込んだ。そして、一緒にうつされたいと言って、円柱の間に立った。さてその時、百姓の女房が夫の後に一寸さがって、手を軽く夫の肩に置いたその様子には、古代的な美しさがあった。いや、更にローマの石棺の表面に刻まれた彫像を想わせたのは、薔薇色のリボンで飾られた子豚を、まるで犠牲の捧げ物のように腕にかかえた子供が、その二人の間に入って来た時だった。

残念ながら中隊長は、ドルツォック攻撃を援助するために、二三日中に、進発しなければならぬという報せを齎した。これはチェルノヴィツ市の東の方に聳えている尾根だったが、そこは大部隊のロシア兵によって守備されていた。尤も陣地などはごく粗末なものらしかった。中隊長は私をさそって、すぐ近くにあるオーストリアの砲兵陣地を見に行こうと言い出した。そこには、世界中で一番大きな大砲があるという。私はむしろナウジカアに帰りたかったのだが、軍事施設見学を断るための口実としては、その場合ホメロスでは役に立たなかった。明るい黄昏がやってきた。東風が吹いていた、百千の光に映えて葉を波打たしている広大な黍畑の間には、鈍い緑の粉みみたいな種子をつけた麻畑がある。又、一度は世にも澄んだ水が噴き出している、石でまわりを滑らかに囲んだ深い箱井戸に突き当たった。遂に銀色のポプラの間から、有名なスコダ白砲の聳えているのが見られた。中隊長はその怪物の前に立ちどまって感嘆を久しゅうした。それは何か氷河時代のもう死滅した生物の一種を想わせる。当直士官たちは我々を親しく迎えてくれた。その時、一人の若い見習士官が私の注意を惹いた。その細っそりとした姿恰好は、巨大な殺人武器の陰に何となくそぐわぬような気を起させた。顔も細面で蒼白く、厳粛な暗い冥想的な眼をした若者で、兵士というより若い牧師に近い。彼が名告った時、私は大いに驚き、且つ悦んだ。知らぬ他国の真中で、私の前に立っていたのは、他ならぬ詩人マックス・メルだった。私たちはつい最近手紙を取交わしたばかりのところだった。彼の詩は二三、私も暗誦出来るほどによく知っていた。彼に会ったことはなかったが、常日頃色々な理由から、私は感謝の念をもって彼を敬愛していた。ほどなく私たちは巨砲に背を向けて、我々が大切に考えていることを語り合った。新しい時代が始まり、崩壊の騒乱の中から何か黒い巖のようなもの、すべて今まで記されてきたものが試練を受くべき黒い試金石が聳え上ったのだということは、どちらも口にこそ出さなかったが、私たち二人がはっきりと感じていた。沢山の非常に声高な、あるいはとても頭の好い文学がその響きを失って行くのに、メリケのやさしい抒情詩のみは戦乱の喧騒けんそうの唯中なみちにあってさえその余韻を保ちつづけているという慰めに満ちた現象を、私たちは互いに確め合った。その場に居合せた士官連は、私たちの談話によって、別に邪魔をされたという風も見えなかった。彼等は微笑を浮べて話に聴き入っていた。怖ろしい巨砲は暫時ざんじ忘れられてしまった。残念なことに我々のまどいは突然中断された。丁度我々は、心から結ばれていると考えている若い詩人にして伴侶たるフェリックス・ブラウンのことを話し合っていて、まさにメルが、ルドルフ・カスナーを誉めて、

私も亦私で、背囊の中にこの比類なき探求者にして研究家の初期の著述『音楽のモラル』を持っていることを勇んでメルに告げようとした時、---- すっかり軍装を調[ととの]えた従卒のレームが、息せききって野道を走って来、大隊が非常呼集を受け、すぐ出発するというのを汗だくでしらせてくれた。互いに無事を祈り合い、握手をして二人は別れた。その後今日まで、我々はまだ際会の機に恵まれていない。

私の手記は、あの出会いに続く長い進軍について報告している。目的地は皆目判らなかつた。だが次第に円屋根の輝いているチェルノヴィツ市がはっきりと眼前に高まってくる間中、メルという詩人の本質が私の心につきまとして離れなかつた。彼は自分のしていることを全く物語らなかつただけに、それだけ一層強く後までも私はこれに動かされた。しかし彼があれほどまでに他人について正確に落着いて物語り得たということは、彼の内的な所有物が如何によく整頓され確乎たるものであるかを証明して猶余りあるのである。我々は二人とも静かな生育途上にあつた。が、もし戦争が浄化の炎であつたならばそして時代のあらゆる人々がこれを受け忍ばねばならぬのであるならば、戦争はもう確かにその最後に近づいていたのだ。少なくとも私には既に戦争が、まだ恐らくは怖ろしい炎を放ち人を苦しめはするものの、もう焼き焦すことの出来ないような、そういう冷却の地帯に歩み進んでいるもののように考えられた。その代り私はメルよりも歳をとっているにも拘らず、まだ浄化の山の麓を辿っていたのだ。腐敗していく世界の暗い灰色の旗は、依然としてその陰を私に投げつづけていた。私はまだ幾多の螺旋の路を頭上に仰いでいた。その路を辿って行けば、私が既に地上において懂れている唯一の樂園に向つて、即ち存在により深いより明るい観照へと本当に通じているかどうか、螺旋の階段を眺めているだけでは、これを知る由もなかつた。

ブルートの平野に下ってきた時、もうあたりは真暗だつた。夜の闇の中に拡がった流れには、燈火がじっと立ちどまったり、静かに漂い流れていたりした。ほどなくその灯は兵士たちが魚をおびきよせるために、ボートのみよしにとりつけた燈火であることが判つた。突然船の向きが変つた。灯は急に見えなくなり、船のまわりの水面だけが澄んだ深い緑に照らし出され、向う岸の小石や叢が明るく照らされた。行軍を続けて行く間にも、我々は度々水の面を漂っている燈火を振り返って見た。それは実に色々な意味を持っていた。なぜならその灯は、飢えた兵士には幾分腹を満たす助けになろうが、我々どことも知れぬ未来に向つて急いで行く者の眼には、親しい挨拶のように映つた。そのため我々は、あの灯が静かな魚たち水の住人を死へと誘つて行くものであることを殆ど忘れていたから。

**

戦場での最後の数週間は北フランスで過した。この時期は、我々の部隊にとって全戦争期間を通じて最も動きの多いものであつた。勿論、愈々本式に戦列につくまでには相当長い期間を待たなければならなかつたとはいえ、大隊はひっきりなしの移動また移動で、非常呼集、夜間行軍などときりがなかつた。既に神経は停頓の無気味な徴候を現し始めていたので、ルーデンドルフが我々をその絶望的な企図の中へ、当時の兵隊言葉でいわゆる「ぶち込んだ」時には、むしろそれは解放であるかのように思えた。あの頃の混沌たる夢のような日々の出来事は、もう大分忘れてしまった。しかし、今日でもまだ人一人の決意が他人に対してどれほどのことを成し得るものであるかということを見事に示してくれた一人の平凡な下士官の態度が依然として記憶のうちに刻みつけられている。それは特別の名誉を獲ようとしてなされたことではなかつた。手の届くかぎりの勲章ならば、もうどういふものでもその略章であるリボンが、その男の軍服に、埃にまみれて長い列を作つてさがっていた。その上、大抵の者はこの男を知らなかつた。我々の数ヶ中隊は霧の深い四月の朝まだきに攻撃を開始した。最初に遭遇したポルトガルの歩兵は、我々を阻もうとせず、弾丸を一発放つでもなく、ハンカチーフを振りながら、誰にも注意されもせず我々の間を通り抜けて捕虜になつて行つた。陽が出た。霧は銀色に空の碧の中へ雲となつて上つて行く。部隊は何事もなく二時間ばかり緑の平野を進んで行き、次第に疲労して足を引きずるようになりながら、遂にポン・デュ・アン附近の

地点に到達した。その時、二三步前方を進んでいた男が高く跳び上がったかと思うと、地面に仆れてもう事ざれていた。すると機銃の音が聞えてくる。風が強いので音が弱められ、遠方で鎌を研ぐ槌音のように、のどかに絶え間なしに響いている。----「伏せ！」誰かが叫ぶ。けれどもその命令のさきに、もうみんな伏せをやっていた。例の下士官は、私の少し前の左手に伏せていた。双眼鏡で村はずれの方を窺っている。彼の探している我々の勝誇った進撃の妨害者は、肉眼でも見ることが出来た。並木道の樹木にぴったり身を寄せて、殆ど何の掩蔽物もなしにスコットランド兵が機関銃を構えている。青緑色で襷[ひだ]があり、裸の膝のまわりにひらひらしている短い下着[キルト]で、それがスコットランド兵であることが判る。私の伏せている場所は余り具合がよくなかった。大体それは水の中で、次第に身体の暖か味が去って行く。すぐ横には冬青[そよご]の茂みがあった。去年からの黒い葉の間には、新しい明るい緑の葉が出ていて、それももうきらきらと棘々[とげとげ]しく見える。だがその緑が棘になっている冬青の葉さえも、その時の私の眼には、光沢革の手袋のように柔かく映った。むかしこの植物をドナウの岸辺に植えて、出来ることならそれを私たちの庭の生垣にしようとしたことがふと思い起された。だが冬青はドナウの岸辺にはどうしても根づこうとしなかった。

下士官は肩章に廿三という数字をつけていた。だから我々の連隊の者ではなかった。前進が猛烈を極めたので、色々の部隊の者が入り乱れてしまったのである。周囲には知った顔も知らない顔もある。しかし、みんなが一生懸命に叫び求めていたが、生憎のことに機関銃が一挺もなかった。それに反してスコットランド兵は、どしどしと新しい機関銃を陣地に持ち込んでくるらしい。我々の周囲には、眼に見えぬ蛇がいるように、プューンと言ったり、ヒュッと言ったりする音が聴かれる。そこでこっちも普通の小銃をとり上げて、懸命に撃ちまくったが、それもただ青緑色のスカートをつけたスコットランド兵の姿を見えなくしたただけのことしかなく、蛇のような音はそのために少しも減りはしなかった。私の前には、年輩の肥った男が伏せていた。濡れて冷たいのがどうにも我慢出来なくなると見え、半ば身を起して乾いた地面を物色していたが、すぐ躍るような恰好をして、銃と軍帽を取落とし、ぱったりと仆れて、苦しそうに呻き始めた。助けるのは勿論私の義務だ。私はじりじりとその男の方に匍[は]い寄った。すると例の下士官が注意した。「伏せのままです！軍医殿」と流石に命令口調だったが、調子を柔らげてつけ加えた。「もう医者の手じゃ及びませんよ。」----「伏せのままだぜ、飛んでもない！」----と今度は私の部隊の一人が叫んだ。私は言いなりになった。倒れた兵士はもう動かなかった。下士官は胸ポケットから報告帳と鉛筆を取り出して、何事か書いている。時が経った。陽が高くなった。舌打ちとプスプスというような音は少し激しくなってきた。----「じきやめるでしょう。逃げなければ、後を切られるんだから。」こうぶつぶつ言ってよこしたのは、私の下にいる衛生軍曹のデームだった。私は頷いて見せた。デームは、馬鹿に老けて疲労して見える。妙な恰好をしている若い男が眼についた。小便でもしようとするのらしい。しかし見ていると、蒼白な顔をし出したので、私は勿論のこと他へ視線を転じた。海の方からは冷たい風が吹いてくる。凍えるように寒かったのが、熱っぽくなってきた。この春はもう度々そうだったが、この時もまた、それから先もう長く勤務に堪えて行かれないのではあるまいかという懸念が湧いてきた。しかし私が、頭の中で休暇請願書の文句を考えている間に、また風のように軽やかな少年の日の精霊が訪れてきた。書き始めた物語が思い出された。はっきりとした細部が空想を補って行く。私も下士官のようにして、報告書を引っぱり出して、これに書いた。あの瞬間私に近寄ってきたのは私の人生の一番初めの頃のことだった。その時私は、大抵の子供の考えるこの世界の姿というものが、地球をただ円い盆のようにしか考えなかった最古のギリシャ人たちのそれに幾分似ているということに気がついた。私の場合、この地球というものは、一方の端では沢山の白い尖った頂を見せたアルプスの峯々に終っており、他方の端では上バイエルン高地の、青味がかかった、あるいは灰色の遠い靄[もや]の輪のうちに終っていた。この眼に見ることの出来る世界の向う側は、いきなり永遠に流れている虚無のオケアノスの河になっていた。人がアメリカとかフランスとか言っているのを聞きはしたが、それがどういうものであるか、考えてみることは出来なかった。ただそういう国々もやはりこのお盆の中にあるのに相違ないということだけは判っていた。中でも不思議で堪らなかったのは、いつだったか父親が話してくれた万里の長城のことだった。

それ以上遠いところにあるものは、世界中に何もなかった。そして、ケーニヒスドルフからなんか到底見えはしないのだと両親は言いきかせてくれた。ところが既にその翌日の午前、私はある丘の上からほぼヴォルフラーフハウゼンと覚しき方角に、紛れもなく万里の長城を発見したので、私の喜びときたら全く途方もなかった。それはきらきらと輝きながら、遙かに暗い山脈に沿って走り、森の背後に消えていた。私は父親のところに駆けて行った。父は私の遠目が利くことを認め、自分は眼が弱いから今までに一度だってあの有名な建造物を視る機会に恵まれなかったのだと残念がるので、私はもうどうしようもなく大得意だった。父は、私の妄想にうかうかと合槌を打ったことをきくと後悔したに相違ない。というのはその時から父はもう静かにしていられなかったからである。どうか内の二頭の馬を馬車につけて、私と一緒に支那まで行ってくれと私がしっこくせがむので、父はきっと大いに困り抜いたことであろう。それでも私は、仕事で忙しい父親を説き伏せて、とにかく支那へ行かないまでも、万里の長城のありかを父に教えてやる段取りに漕ぎつけた。だが不可解なことが持ち上った。私たち二人が丘の上に到着した時、万里の長城はもうそこからは見えなかった。雨雲が垂れて眺望を遮ったのか、あるいはあのアルプスに近い地方の、実際によく変る光線の具合が眼を欺くのか、---- どちらにもせよ、万里の長城の影も形も見えなかった。私は困惑してヴォルフラーフハウゼンの方角をあちこちと指さした。そこには何もはっきりしたものが見られなかった。私は父に少々辛抱してくれと願ったが、何分家には患者が沢山待っていた。そこで遂に私たちは道をとって返した。父は大笑いに笑いながら、私はしくしく泣きながら、この世界的な奇蹟は、翌朝再びはっきりとその姿を現したが、もう駄目だった。何としても、父は最早その丘に行こうとはしなかったし、のみならずかつがれるのはもう懲りごりだなどと言って私をいじめるのであった。いや私が証人を二人連れてきた時も、おとなしい隣近所の子供たちで、二人とも私の観察が本当であることを名誉と至福にかけて誓ったのであるが、父はさげすんで向うへお行きと目くばせした。しかし後には本当の医者らしいところを見せて、その日の晩には『四阿[ガルテンラウベ]』誌を一冊持ってきてくれた。そこには嵐の黒い空の下にぼんやりと幻影のように明るく、弁髪番人が一人立っている万里の長城の一部が見られた。この小さな挿絵を父は雑誌から切り取って、私に説明してくれた上に、寝床の枕許に張りつけてくれた。それは今や私の財産となり、私は大満悦で、二度と再びあの丘に登ろうなどという気を起さなかった。

フランスの野にかがみ込んで、この追憶の多彩な虚無を書きとめている間に、私はまたしても自由な作家の境遇というものを羨[うらや]み出した。作家はかたつむりのように自分一人きりで仕事を殻のようにどこへでも背負って行くことが出来る。どんな人生の天気模様の時でもそこに棲んでいることが出来る。下士官の方を見やると、私が済んでしまったのに、彼ばかりはまだせつせと書いている。我々の状況は以前と同じだった。しかし少し離れたところに、私はある感動的な、非常に怖ろしいものを目撃した。そこには老人と老婆とが、腕を組み、ぴったりと寄り添い、てんでに包みを一つ提げて、その朝我々の攻撃の開始されたアルマンティエエルの方に向って果てしなくのろのろと歩いて行くのであった。---- 死の緑野を真直ぐに立って歩いて行くたった一組の人間である。恐らく百姓の老人夫婦で、何も訳が判らないものだから、ドイツ軍が侵入してきた時に村を後にして、レストランか、あるいはメルヴィイユに行こうとしていたのであろうが、何分にも足が遅いので、両軍の戦列に挟まれてしまい、今はやむなく捨て鉢に元きた自分たちの村に帰っていかうとしているのであろう。二人とも黒っぽい着物を着ていた。男の方は包みの他に大きな雨傘を持っていた。婆さんの方は負傷しているらしい。白い布を頭に捲きつけている。歩くのがせつないらしく、老爺に縋っている。---- 「伏せろ！メテ・ブ・ザ・テル！」と四方八方から声がかかった。だが二人は左も右も顧みずに、スコットランド兵のお目こぼしにあずかりながら、のろのろと歩き続けていたが、やがて斜面の彼方へ視野から消え失せてしまった。

下士官はやっと書き終えた。紙片を封筒に入れ、舌でしめして封をし忙しく宛名を書いた。彼が手紙を胸のポケットに入れた時、私は上書の「夫人[フラウ]殿」という文字をはっきり読むことが出来た。それから櫛で頭髮と髭とを梳いて、しばらく静かに伏せをしていたが、突然、自分が忽ち將軍か何かになったように命令的に鋭く叫んだ。「ど

うしたんだ、みんな。---- 夕方までこんなところに愚図ぐずしていようというのか。憚[はばか]りながら、己は出るぞ、一、二、三！」誰かが何か口を挿む暇もあらせず、彼は跳ね出た。怖ろしい叫び声を挙げて、六七歩駆け出したが、忽ち英国の弾丸が彼を撃ち仆した。後で分別臭い人々は、あれは神経がどうかしたか、気でも狂っての仕業だ、どの道あんなことをしなくともよかったのだ、もうあと十五分もすれば不屈な敵兵は村を放棄しなければならなかったのだ、さもなければ包囲されただろうから、と言ったことだったが、あの瞬間には、誰だってそんな気の利いたことを考えられはしなかったのである。戦死者の身体からは、電気の火花があらゆる人々に向って飛び散った。もう恐怖などはどこかへ行ってしまい、我々はひと起きに起き上り、死者の精神に憑かれて喚声と共にポン・デュ・アンに向って突っ込んだ。すると、どうだろう。あの勇猛な下士官を仆した一斉射撃は、実に一番最後のものだったのだ。弾丸の唸りは沈黙し、村を我々が突き抜けた時、広い野原には、逃走するスコットランド兵のスカートの緑と青とが見られるのであった。彼はレストランの市街に防禦を求めて退却していったが、次の夜はそこも我々の占拠するところとなった。

**

それから二三日後、私は思いがけなく若かった頃の一番混乱した時代を追憶している自分の姿を発見した。既にメルヴィーユの市は我々の背後にあった。そしてまさにニーブの森を包囲しようとしていた時、優勢な英国軍の反撃に出遭って俄然進撃を阻まれてしまった。私はル・サールの村で左腕に負傷し、大廻りにまわって真夜中頃、既に上に述べたレストランの小さな市に辿りついた。その間本部繃帯所がそこに設けられていた。私は超満員の病室に収容された。行軍と出血とにすっかり疲れて早速眠り込んでしまったが、眼を覚ました時には、部屋一杯に陽がさし込んでいた。最初眼に触れたのは、丁度今部屋から運び出されていく二人の死人だった。どの寝台にも重傷者が横たわっており、多くは昏睡状態であった。看護卒がパンと缶詰の肉を持ってきてくれた。開かれた窓辺に座って、これを食べながら、広い中庭を眺めた。半分は花壇になっている。その真中には落葉松が一本立っていて、緑の芽を一杯につけていた。幹のまわりは狭い苗床に取り巻かれ、莖に青く彩られている。腕に人形をかかえた、茶色の巻毛の小さな女の子がそこを往ったりきたりしながら、ひっきりなしに歌い続けている。「ニュランベール----ニュランベール----ニュランベールのお人形さん.....」手足がふるえ、腰の曲ったフランス人が一人、ドイツの歩兵に注意深く案内されながら、扉の開け放しになっている便所の方によろめいて行く。歩兵の上衣には、勲功章の略章リボン、殊勲章メダル、負傷徽章などが隙間もないほどにつけられている。身体の利かぬ老人は、道の半ばでもうズボン脱ごうとした。だが巧く行かない。そこでぶつぶつ言いながら、彼は敵の世話を甘受しなければならなかった。ドイツの歩兵が静かに目的の場所へ老人を連れて行き、機嫌の悪い老人にあらゆる必要なことを真心こめてしてやった様子は、まことに痒ゆいところに手が届くという具合で、そういう風なやり方は、ただ恐らくバイエルンの農夫のある一族にしか見られぬようなものであった。この一場の光景は、人間の世の中に時折見られる心愉しさに関する強い感情を私に与えた。

私は若い軍医の診察を受け、傷口から砲弾の破片を摘出して貰い、繃帯された。もう一時間したら、バスが一台、ポン・デュ・アンとアルバルジュを経由してセクランに行く。セクランではきっと野戦病院列車に乗れて、ほどなくドイツに到着することが出来ようとして教えてくれた。私は良い機会を識ったことに感謝して、私の荷物で残っていた僅かばかりの品々を取り纏め、やっとなことバスの中に空席を見つけだすことが出来た。途中は熱にうかされて、訳も判らずに過ぎたが、何物かが、夢を見ている時のように私を強いて、道路の端に仆れている馬の死骸を数え始めた。七十頭まで数えた。二日以前、我々は負傷者の傍を通り過ぎる時に必ず棒切れか小枝を地面に立て、それにハンカチーフとか軍帽などをかけて、後からやってくる衛生隊の発見を容易ならしめるようにしておいた。そういう印が、まだ亡霊のように、明るい春の野辺に立っていた。それを数え始めている間に、突然他の一切のものを押しのけて、前の日の出来事が意識に甦[よみ

がえ]ってきた。私は突然衝撃を受けて、ぐっと横に押されるように感じたが、それに引きつづいて地面が鈍く、殆ど音もなく揺れ、外套の釦[ぼたん]をかけようとした時、腕を軽く打たれたような感じを覚え、路をとって返すと、つい今しがたまで私と話をしていた人々が悉く死んだり、瀕死の重傷を負ったりして倒れているのを見た時の驚き。無数の戦いにあって賢明に飽くことなく私を助けてくれた伴侶であり戦友だった衛生軍曹デームは、まだ私の顔を見ようとして一生懸命に眼を開いていたが、その眼の光はもう正気を失った人間のそれだった。傷口は見当たらなかったが、蒼白の顔色を見れば、もう臨終の近いことは明らかだった。「痛むかい、デーム？」と訊ねると、彼は叫んだ。「はい、死ぬのであります。」黙って見てはられない気持で、傷口を見つけ出そうとしたが、デームは両眼を閉じ、もう一度息を吐いて、それきりにこときれてしまった。それから、死体のごろごろしている中に、途方に暮れて立ち尽す、ずたずたになってしまった手荷物の中から手記を書いたノートを探して引っ張り出そうとする、そしてどどのつまりが、あのレストランへの長い路だった。そこに向かって歩きながら、私は半ば無意識に、一体こういうこと全部は無駄な仕事ではないかと思いつけたが、そこに行われたこと一切を抑々理解する必要はなく、このまま家路を辿ることが出来るのを悦びさえすればよいのだと自分に言いきかせて、そういう考えを払い除けてしまった。

セクランについてからまず第一にやったことは、私の現金を保管していた我々の忠実な主計官ボアサンを訊ねることであった。彼は私の姿を見て驚いたらしく、握手することも忘れてしまった。誰かが、私の戦死をしらせたので、丁度彼は今、現金と配達されていた郵便物とに帛状を添えてミュンヘンに送ろうとしているところだった。給食部士官のカール・ボンフィヒも顔を見せ、私が死なずにいたことを悦んでくれて、旅行用にと色々な食料品を持たせてくれた。胸に熱いものを感じながら、私は二人の男に別れを告げた。この二人は、永年の間西部戦線でも東部戦線でも、何一つ愚図々々言わずによく私たちの面倒を見てくれたのである。路端の戦地図書販売所の前を通った。エーヴァースの『アルラウネ』とトーマス・マンの『神童』との間に、私が絶対に他の書物と間違えっこのない仮綴の灰色の小さな本を見つけ出した。『ドクター・ビュルガーの手記』である。この作品で私は、最初の頃の医師時代の体験を、描写するというよりむしろ暗示し、恐らく、仮定の没落を描くことによって本当の没落に先手を打とうとしたのである。古本だったので、二三ペンニヒでその一冊を手に入れた。どんな読者をも強く惹きつけたことがなかったらしい。頁も碌に切っていない。だが、「今日では、名誉の多くの職場がある」という一文には、鋭く線が引かれてあり、これに二つの尖った疑問符が打ってあった。読み始めたが、すぐ又やめてしまった。昔の苦労や不安などは、もう全くとるに足らぬ、時代遅れのもののように思われた。しかしその後、暖房のない病院列車の中で、ボアサンが手渡してくれた幾通かの手紙を読み出した時、人生というものは私たちによく二重の印によってある種の事柄を想わせるものだということが、やはり明らかになってきた。それまでも時折は、私が発表した僅かばかりの書きものも、詩人の間には反響を見出すようなことはあったが、けれども読者から何か言ってきたことはただの一度だっただけでなかった。しかし今一通の手紙を読むと、ライン地方の未知の女性が、『ドクター・ビュルガー』中の詩『遁走』の独白にすっかり感激し、精神的な快癒をさえこれに負っていると書いてよこしたのを見て、私はひどく感動してしまった。有名な文士たちは、恐らく読者の感謝の言葉に慣れっこのなっているであろうが、この思いもかけぬ呼びかけは、私にとって何か異常のここのように思われた。それにあの帰国の旅路にあった時ほど、そういう呼びかけをしんみりと味えたことはなかった。死は間一髪のところまで逸れてしまった。これからの人生は、本当に一つの賜物[たまもの]なのだ。戦争が私を吹きとばしてしまわなかったような場合に、私の生活が外的にどういふものになるだろうか、容易に言うことが出来た。平和だった時と、大して変りもすまい。私はまた患者を訪れ、他人の苦しみを記録し、診断し、予後を診定し、薬を処方し、診断書を認め、屢々夜中に叩き起され、時には休暇旅行に出かけ、あちらこちらで詩の一つも書いたり、一頁ほどの文章を綴ったりすることだろう。昔ながらの狭隘な生活形式が私を待ち受けていた。しかしそれは、最早あの重苦しさを失[な]くしているのだ。人生の流れは二度と再び昔の岸辺に戻らない。それで、たとえ私がこのさきざき以前の職業を続けて行こうとも、それはもう昔と同じことを意味する筈があり得なかった。制作上の

努力について言えば、私が人間の一般的な宿命に進んで屈従し、自分の身の上に例外的な運命を望まなくなればなるほど、それだけ一層色々なことがうまく行くということを経験したのである。私は医業を続けて行こうと思った。そして、何かものを書く場合には、精確な適用法に多年習熟している毒物を取扱うのと大して違いのないようなやり方で、言語に対しようと思った。その際私は、何かあるものが自分の天性に具わっていて、この健気[けなげ]な志にいつも秘かに叛[そむ]こうとしていることをはっきりと感じた。そうして結局、我々は自分自身をどれほど知っているのだろうか。芸術家というものには、まさにある種の地盤が朽ち始める年頃になって、深い下の方から魔神の焰が燃え上り、突如として今までとは異った観方なり創作の仕方なりを芸術家に強制するということが決してあり得ぬことではない。しかし今は、時勢の許すかぎり私は何を措いてもまず人生を愉しもうと思った。医者治療手段に自己の感情を混入せしめ、医者を患者に、あるいは患者を医者に内面的に依存せしめるようにすると、医者というものは大して患者の役に立たないということ、ドクター・ビュルガーはこれを知らなかった。私がこれを呑み込むまでには数年の歳月が必要だったのだ。私は自分に向かって言った、自分自身が健康な生活を続けていて、日々の時間を理性的に用いている時にこそ、私の治療法は最も素晴らしい成功を見せるだろうと。疑いもなく私は作家として、恐らくはこれからさきいつも自分の生活の末々までも仔細に観察して行くであろう。共通の運命を知る途は、ここを措いて他に求められはしないのだ。偉大な予言者や芸術家は、安んじてこの途を軽蔑してよい。だがこの途を非難しつづけてきたのは、常にただその人自身の一日が何等特記せらるべきものをも生み出さなかつたような人々のみである。一箇の自我が、どれほど多くの平面、どれほど創造的な平面の上に自己自身を確証して行くか、これこそ問題なのだろう。芸術家がこの上もなく変動の激しい時代の中に向かって生長して行かねばならぬならば、それは芸術家の精神にとって一箇の祝福なのである。ただそういう時代のみが、やはり芸術家の内部からその最も深いものを取り出すことが出来るのである。動乱の世界に向かって弾劾の言葉を叫びかけ、あるいは人間には答えられぬような問いを投げつけるという衝動は私に欠けていた。民族が物悲しく地面に眼を伏せている試練と屈辱の年月こそ、詩人が常に民族に最も近く立っている時なのである。詩人は、焰のしるしと神聖な絵図を険しい途に縊[さ]しつらねる。彼は原始の時の偉大なる預言を現在に呼び出だす。彼は、あらゆる真の創始者や衝撃者に血縁を感じず。しかし、詩人が自己自身の内部において堪えねばならぬ幾多の争いは、現世的諸権力の抗争とは度々異った平面に属するのである。勿論時として、この二つの平面が合一し、一般の勝利が同時に詩人の勝利でもあるような場合があり得る。しかしそういうことになれば、その時こそ始めて詩人は、結局自分が常にどんなに孤独な人間であるかを感じずであろう。そして詩人は、より一層、沈黙と諦念との宿命を持った人々の魂を尊重するに違いない。

自分の辿る途を示すことによって、他人の途に光を投げ与える、私の念願はつまりこれであった。だがそういうことは、芸術という夢に似た手段に訴えてのみ可能であった。また私は、人に花束を贈る時に、花の代りに根株やそれについて土くれなどを差し出したくはなかつた。それでは多すぎて、しかも少なすぎるであろう。それからまた、それが人を驚かすのはただ最初の一二回だけのことだろう。勿論我々は、動物的に生暖かい生育土なしには生命をつないで行けないし、仕事も出来はしない。だが我々自身は、そういう動物的な部分においてはお互いに余りにもよく似通いすぎているという事実を、ほどなく何人も認めることであろう。同じ森の土の中から、毒茸も生えれば、薬になる石茸も生えるというわけなのだ。---- 我々が土壌の組織に通じているからといって、それは同時に我々がこれら二つの植物の本質に通じているということになるだろうか。我々の芸術的意図が高ければ高いほど、我々はそれだけ一層低俗なものを我々の作品の中に受け容れてもよいのである。但しある種の事柄は、ひとり神のみが危険なしに語り得るであろう。なぜなら、多くのものは、我々がそれを我々の身体のうちには保存している限り、罪がなく強く健康によいのであるが、一旦それを外に出したとなると、未熟なもの、賤[いや]しいものになってしまうからである。たとえば唾[つばき]なども、それが口中にある間は、生命に不可欠の要素ではないか。唾は血液から生れて、再び血液と成る。そしてこれがなくなると、死は間近に迫ってくるのである。けれどもこれを外に吐き出すと、それは忽然として侮辱の厭らしいしるしに変わってしまう。ただ創造的な手の

みが、あらゆる材料を高貴なものにすることが出来るのである。即ち、ゼウスやポセイドンやヘルメスは、塵を唾で捏[こ]ねた。そして、そこからオリオンを創り出したのである。

*

**

それからの数週間は、勿論万事が巧く行きそうにも見えなかった。野戦病院を幾つかめぐりめぐって私はミュンヘンにやってきた。静かな時が始まるように思われた。二日目毎に病院に出かけて、腕の傷の療治を受けなければならなかった。突然これが私の戦時勤務のすべてとなった。数年来あこがれていた妨げられぬ朝と夕のひと時、それが今そこにあったのだ。私がよいものを書くのを妨げるような者は一人もないわけだった。いい思いつきも欠けてはいなかった。それなのに、まさしくあの頃は一行の詩も文章も紙に書き出すことが出来なかったのである。戦地での過度の緊張や疲労に慣れてしまっていた神経は、今改めて静かな時を利用する術[すべ]を学ばねばならなかった。既にして避け難いドイツの宿命の広い暗影が、生活の上に覆いかぶさってきた。飢餓、悲哀、驚愕、憤怒が世人の面を歪めた。何人も自分が裏切られたのだと思い込み、かえって自分が裏切者になって行った。絶望を甘味な毒物のように味った者も少なくない。没落の予兆を見てむしろ小気味よく感じ、呪詛のうちに陶醉した。だがいつれ道、こういう人々は、今に立ち至ってもまだ陽気な顔つきをし、粗悪な煙草をくゆらせて、ドイツ国民のような国民には決して凶[わざわ]いことは起りっこないのだなどと嘯[うそぶ]いている人々に較べたら、まだしも我慢出来たと言えよう。

私の医学上の知識にぽっかり口を開いたブランクを填[うず]めようとし始めた頃になって、どうやら次第に失われていた均衡状態が再び立ち戻ってきた。再び医学週報の類を手にとり、フリードリヒ・フォン・ミュラー、エルンスト・フォン・ロムベルク、ザウアーブルーフ、パウンドラー、その他著名な臨床家たちが医者招待する夜の講義にも出席し出した。これらの諸大家は、戦争にもめげず各々の領域にあって精進を続け、世のためになる経験を蒐[あつ]めていた。そこに私は自己の進むべき道しるべを視、医術を行う人々の大きなまどいに属するということ今再び心嬉しく感じた。いつから患者に接し始めるかは、まだとにかく未定だった。西部戦線での戦闘は依然として猛烈を極めている。軍医局の方からも、既に私の回復予定期に関して問合わせがきていた。ミュンヘンでの名医の一人、ドクター・ハンス・シュタドラーは、私の傷が思ったより深部に達していることをレントゲン写真で証明してくれた。このさきまだ幾週間も治療を受けなければならぬと言われた。そこで私は、この余暇を利用して、自分の診察室の設備を整えようと考えた。時代遅れになったものや、使用に堪えなくなったものが多かったので、ある日の午後、シュティーフェンホーファーの店で医療器具を買い補うために、カールスプラッツへ出かけた。その昔はあれほど賑かに光り輝いていたミュンヘンは、嵐を孕んだ雲を浮べた八月の空の下に、気を失ったように、掠奪を受けた後のように黒々として横たわっていた。運命の女神の立っている噴水には水音もなく、花壇には花影もなく、ベンチに腰を下している人といえば、傷病兵や老人や、不幸によって結ばれた喪服の女たちばかりだった。陳列窓の中には、器具が並べられてあった。色々と便利な品物が考案されていた。殊に私が惚れ込んでしまったのは、新式血圧測定器である。口や喉や耳の中に強い光を射[さ]し入れるための、自由に位置を変えることの出来る頭にかぶる鏡などもあった。それから又胸部諸器官を聴診するための、しなやかな管のついた、非常に精巧な聴診器もあった。それらの中には、注射器、ピンセット、解剖刀、鋏、オルガンのパイプのように並んだ試験管などが見られる。そういう色々な品物は、大きな硝子窓の中に実に巧みにあしらわれて並んでいるので、ここにもやはり最早昔のような良い材料で作られた品物があるのではないということは、一寸見渡した位では中々判らなかった。赤い丈夫なゴム管の代りに、少し使えばすぐ駄目になりそうなことのよく判る灰色のゴム管があり、本来皮で出来ている部分にも、何か貧弱な代用品が使ってあった。そうは言うものの、これらのきらきらと光る色々の品物の上には、我々の胸をゆするような、何かしみじみとした人間味が漂っていた。そこにあるどの一つの器具も、人体のかけがえのない器官を研究し、保持し、苦痛を取り除こうという良い意

志をみなぎらしていた。きっと、どんな観念もすぐ反対観念を呼び起すものだからであろう、私ははしなくもあのスコダ白砲のことを思い出した。その陰で詩人マックス・メルと出会ったブダ・マハラにある巨砲である。ああいう巨大な大砲は疑いもなく、ここにある可憐な医療器具と同じく、技術の粋をこらして作られたのであり、恐らくはここにある品々よりもずっと堅牢な材料から成っており、どの道、あのかげがえのない人体を打砕き粉々にし滅茶苦茶にするには見事に役立つものなのである。この比較は不快だった。しかしあのマンモスのような大砲は、今私に神秘的な自然法則を想起させた。即ち、まさに原始世界の巨大で不格好な獣類たちは発展性が少なく、やがて姿を消してしまっただのに、却[かえっ]てとるに足らぬ昆虫類の多くが、その後幾百万年かを生きのびて、静かな変様のうちに漸次見事な型態を創り出して行ったという、あの自然法則である。そう云う次第で、巨大な殺人機械が何か自然の出来損いのように見棄てられ、人類の古い鉄屑として片づけられてしまい、一方その陳列窓の中に横たわっているような、精密で優しく精妙な器具には確かにこの先きさきまだ幾多の完成が期待されるような日がくるのも、そう遠い将来のことではないように思った。

しこたま買い込もうと決心して、店の戸口に歩み寄り、丁度ドアの把手に手をかけた時、誰か優しく、しかし力をこめて袖を引く者がある。振り向いてみると、リルケが笑っていた。私が最初フランスに出征して以来、会うのは今が初めてだった。私の悦びは大きかった。リルケもそれを感じたらしい。けれども、彼の容子には甚だ憂うべきものがあつた。お身体は如何ですと訊ねると、リルケはどことなく具合が悪いと訴え、一つには自分のからだにそぐわぬ食料に原因があるらしいと言った。こう言われて、以前彼が洩らしていたことを思い出した。即ち彼は、どんな病気でも絶食で癒[いや]してしまうのだそうだった。だが今はリルケも、この療法を極度に用いて、もうそういうことでは却て身体によくないというところまできているらしい。生憎のこと、その頃は牛乳、バター、卵、小麦粉、碾割[ひきわり]などという無刺激性の滋養物が手に入り難かった。別れ際に彼は、明日日本式の診察をして貰いたいと願った。ヴィッテルスバッハの噴水のところで我々は別れを告げ合った。私は急いで店にとって返し、私の専門に必要なと思われるものを色々を選び出した。それが済んでから、書式を貰いに役所へ出かけた。重患に大切な栄養分を多量与えようとするには、当時ドイツではどんな医者も、そういう書式に事情を書き込まなければならなかったのである。上機嫌で家路についた。新しい臨床活動がこういう患者でもって始まり、細心に選び出した医療具がこの患者によって初めて使用されるというのは、この上もなく幸先[さいさき]のいいことだと思えた。

**

それから二三日後、ビア・ホールのホーフブロイで、私を子供の時分から知っているという南バイエルンの中老の農夫に出会った。女房が数ヶ月来床についたまま、夜も殆ど眠れないような有様だから、是非一度診察して貰いたいと言われた。今までのところでは、身体が麻痺しているようでもなし、さりとして何か病気があるらしくも見えない。恐らくただ心配と悲しみのためにそうなってしまったものらしい。息子のうち、二人はフランスで戦死し、一人は解除になったがまだ一番末のが戦争に出ているので、この子一人が気がかりになっているのだという。私は往診を約した。ところがこの往診は、普通にはただ芝居にしか見られないような具合に結末を告げることとなった。芝居ではよく丁度いい時に、郵便配達夫が手紙を持ってきてくれ、万事が解決するものである。

雲の多い冷々とした八月の午前、D駅に到着すると、例の農夫は駐車場の後に小さな馬車をもって迎えに出ていた。単調で平坦な地方は次第に見覚えのあるものになっていた。途中で穴の中から砂利をすくい出している老人を一人見かけたが、すると私はいつのことだったか、緑の広い茶の麦藁帽をかぶった父と、どこかこの地方を、歩いたことを思い出した。父は町方風の身なりをした幾人かの紳士にシャベルを担いだ男を一人つれて、注意深くあたりを見廻しながら歩いて行った。三十年暗いも前のことだろうか。当時父は「南バイエルン歴史学会」の会員になっており、古墳のありかを的確に嗅ぎ出

すので評判だった。紳士方は態々ランツフートから、父が推定した場所でケルト族の墳墓発掘に立会うためにやってきたのであった。遂に何か発掘されたが、私の眼にはまことに詰らないものだった。だがお客様方は大満悦で、悠暢[ゆうちょう]な発掘人夫が土器の破片を二つ三つ掘り出したり、あるいはかさぶたみたいに凸凹[でこぼこ]した腕輪などを拾い上げたりすると、その都度歓声を挙げて喜ぶので、私までも愉快だった。そういうこと一切は、もう遠い昔のことだった。昔も昔、遙かな過去---- 民族全体が此の世から消え去るというエルンスト・ベルトラムの言葉が、ふと頭をかすめる。そうして今、戦争のことを想うと、それは人を秋のような淋しい気持ちにさせた。狡猾な連中は巧く身を守り、凱旋して、凡庸な子供を生む。強壯で大胆な人々は、渡り鳥が異国の空へ飛び行くように、死の中へ飛び入ってしまった。そして今はただ精霊として我々に結ばれているのである。

屋敷内に馬車が入って行くと、綺麗なくりぬき模様のついた門扉が目を惹いた。勿論大きな割れ目が口を開いている。その昔、ここによく父の馬車が停って、母親らしい人が待っている私に牛乳やパンをくれたものだった。しかし家の中に入るのは、今度が初めてだった。農夫の女房は、鼻のところまで赤い格子の羽根蒲団をかぶり、頭と頬とを白く繻帯していた。挨拶のために手を差し出そうともしない。どこかわるいのだか判りませんが、どうも心臓のあたりが妙なのですと言う。診察してみたが、はっきりしたことは判らない。最後に頭に捲いた布を取り除けてみた。茶色の髪の毛はきれいに編まれているが、顔もまだ老けたというほどでもないのに、怖ろしく蒼白で、悲しみのために硬直していた。どうやら私の顔色に、自分に同情してくれるところを認めたのだろうか、切ない微笑を浮かべながら、半身起し、漸く私に手を差しのべて固く握りしめながら、何の前置きもなしに、散薬でもいい、水薬でもいい、とにかくそれを呑めば丈夫な人間がその場で病気になり、しかも余りひどい害を受けないで死人のように仆れてしまう薬を知らないだろうかと訊ねるのであった。よく本や嘶にそういうものが出てくるが、もし実際にそんな薬があるのだったら、何とでもして一つそれを下さるまいものかと言うのである。むろんのことただでお願いするというのではない、あなた方都会の人たちが食料品にどんなにお困りかはよく判っているから、自分のところから差上げられるようなものでよかったら、この先きざき先生や先生の御家族の方々に何一つ不自由な思いはおさせしない、有難いことに内にはまだ小麦粉や肉や卵、牛脂だの蜂蜜だのが沢山あるのだから、と言う。この望みの毒薬が、どういう目的のために使用されるのかは、われわれには容易に察しがついた。農夫の妻は言葉を濁すというようなことをせず、西部戦線の息子ヴェネディクトのところへ送ってやるのだとはっきり言うのであった。息子はきっとこの薬のために苦しむだろう、身悶えして苦しがるかもしれないけれど、そんなことは構わない。われわれは誰だって苦しんでいるのだから。ただ死んでしまったり、本物の病気になったりしても困る。ぜひとも二三ヶ月の間は、埋葬許可書をポケットに入れて人みたく見えなくてはいけない。そうならば陸軍の方でも仕方なしに息子を野戦病院に送るだろうし、そうこうするうちには家へ帰っても来られよう。それは願いというよりも要求だった。言葉の一つひとつは、惑乱した母権の深みから湧き上がってくる。自分がどんなに途方もない難題を持ちかけたか、絶望した女にはこれがわからなかったのだ。

私は部屋の中を往きつ戻りつして、考えあぐんだ。私が反対したり、或は慰めたりしようものなら、きっと女は私が帰ったすぐあとでどこかの藪医者を迎えにやることだろう。たしかにあの頃は、鍋一杯のバター脂のためになら、どんな手品もやりかねないような医者も多かった。何か見せかけだけのことをして一時女の気を鎮めるという手段も容易に考えられたけれど、そういうことで私の新しい仕事を始めるというのは、どう思っても我慢がならなかった。部屋の中は静かだった。誰も入ってこなかった。夫は態[わざ]と遠慮して避けているのだろう。窓飾りの縁には、黄色い梨のような形の小さな南瓜[かぼちゃ]が並んでいた。外の屋根の梁には、上の方がすぼんで開いている雨燕[あまつばめ]の巣がかかっていた。鳥は棲んでいないらしい。半ばとり入れの済んだ畑越しに、かねてからよく見知っている遠いところまでずっと見渡せた。東の方を二時間も行けばピルスティングの町があるに相違ない。部屋の中には、綺麗なものが一杯につまった硝子戸棚が一つあったが、祖先伝来の古い本物の品々は残念ながら見当らない。どの棚に

あるものも、安物の茶碗だとか燭台のような、うわべだけがきれいな下手物ばかりで、その間には、赤葡萄酒を注いでおいて、飲もうとしても決して飲めない仕掛けになっているタンタロスの盞[さかずき]の一つまでが飾ってある。こういう品物を眺めると、純粹さのために戦い日常平凡な物を悉く棄却し、見すばらしいものに包まれ、既製品を拒否し、抑々の初めからやり出して、ロビンソンのように日用必要品を自分の手で作り出すことによって、自分で織った衣服、自分で削った盃などを使用して再び真の生命の育成を計ろうという衝動に駆られている人々が、どれほど頼もしく思われるかしのれないのである。

私は農夫のおかみさんの希望を一応容れて、私たちがそういう毒薬を知っていることを認めた。けれどもそういう毒は、万人の血液に合うものではないから、危険極まりないものだと説明し、そういうことをやって思わずも招いた性の悪い偶然の結果や、その他色々のことを話してきかせた。これをきくと、女房はまたすっかりしょげ込んでしまった。けれども私が、近道がやはり最善の道であって、連隊司令官と地区司令部に慎重に考慮をめぐらせた手紙を書いて上げよう、万事安心して私に任すがいい、あの人たちを動かすには、そうすればいいかはよく心得ているから、と行ってやると、満足したように見えたが、しかしやはりもう一方の手段の方が自分にはいいように思われるといった。だがそれでも私はヴェネディクトの通信先きを訊ねて、これを手帳に書きつけていると、夫の農夫が、喜びの余り笑い声を挙げながら部屋に入ってきた。手には手紙を一通持っている。その手紙は、私が乗ってきた汽車と同じ汽車で着いたらしく、お蔭で私はそれ以上心配する必要がなくなってしまった。戦地にいた末男が肩に負傷して、既にドイツに向って帰路についたという報せであった。この報知によって現れたような利き目は、世界中のどんな薬を使ってみたところが到底期待し得なかったであろう。長い間寝ついていたおかみさんは、突然がばと跳ね起きて、部屋の真中に踊り出した。泣いたり笑ったりして、まるで亭主とダンスを始めようともいうようにしがみつき、それからいきなり私の両手をとらえ、まるで私がヴェネディクトに傷を負わせてくれた当の人間でもあるかのように、力一杯握りしめた。ドイツ戦闘力の減退が最早隠そうにも隠せなかったリイ運河やニプの森では、今この百姓家の部屋の中で感ぜられるほどには、戦争の採るべき結末をはっきりと感ずることは出来なかったのだ。肩の関節部の負傷は決して見くびることは出来ない。それどころか、数週間後には生命を奪ってしまうようなこともあるのだ。しかし、この善良な人たちは、そういうことをてんで感じてすらいないのである。それに、そういうことを話してやるのは、私の役目ではなかった。私は自分の持物を取り纏め、女房に向って、少なくともあと一時間位は寢床に戻っていた方がよいと言いきかせて、睡眠剤と強壯剤の処方認めて別れを告げた。中庭の方からは、撃ち抜かれた関節部のお祝いのための雄鶏がしめられる啼き声が聞えてきた。台所では、もう賑やかに卵を割る音やパン屑を挽く音がし始め、湯気が立ち始めていた。私が煉瓦を敷きつめた玄関を通って行くと、亭主が穴蔵から、青い花模様のある大きな灰色の瓶を持って上ってきた。彼はにこにこしながら、廉[やす]くもない私の勘定を支払い、間に合うように車の用意をさせるから、どうかまあもう少々の間、今度はお客様になって戴いて、せめて油菓子と李[すもも]菓子が出来上るまではお待ち願いたいと頼み込むのであった。歩いた方が身体のためだからと言って馬車を断り、ピルスティングに用事があると口実を設け、一家の幸福を祈り、ピルスティングの教区になるところまでせつせと歩きつづけて、やっとうっくりし、そこからは呑気に歩いて行った。風は、雲の間を碧い着物のように吹き渡っていた。ほどなく強い午後の陽ざしを受けて、あたりが一面に輝いた。広い畑の上には、大麦の束が積まれてあった。丁度その時、腕まくりしたブロンドの少年が、がたがた自転車で私を追い越したが、すぐ前で車から降りて、ハンドルから籠を二つおろしてかみつれの咲いている畦道にこれを置いた。その横に自転車を立てた。私たちは挨拶の代りに一寸微笑み交わした。すると突然、少年はくるりと私の方を向いて頸からみぞおちのあたりに下っている奇妙な飾りを指さして、「ほら、こんなものを持ってるぜ！」と言うのであった。---- それは玩具だった。木彫りで、彩色してある。ドイツ出来ではないらしい。細い板の上に、木で出来た男が二人向い合せに立っていて、どちらも長いハンマーを振り上げて打ち下そうとしている。すると子供は、大得意に目を伏せながら、板からぶらさがっている紐の端についた丸い木の錘[おもり]

をつかんだ。これを上に引くと、板の上の鍛冶屋たちが小さな鉄敷目がけてハンマーを打ち下すのであった。仕掛けは実に単純なものであるが、だがどこということなしに、私がピーリツツケ山の戦死者から取ってきたあのロシアの暦の様子に似通うものを持っている。その背後には、もっと大きな、遠い忘れられた原型が感ぜられた。あの暦はまだ相変らず紙入れの中に入っているに違いないと私が思いだしている間に、少年の方は玩具を見せびらかす嬉しさに紛れて、籠や自転車のことなどは忘れてしまったようだった。木の玉を引っぱり上げたり下げたりして、胸のところで二人の職人をいつまでも働かせ続けることがやめられないのだ。---- 「誰に貰ったんだね？」---- 「イワンだよ」と少年は答えて、向うからやってくる一人の男を指さした。陽に灼けて、ずんぐりした背格好の男が一人、下女と年寄りの女の横に立ち熊手を肩にして、のろのろ近づく収穫車に躡[つ]いてくる。頭にはロシアの軍帽をかぶっていた。車を曳いているのは、二頭のあめ色の牡牛だった。眼のまわりは、墨で描いたように黒い輪になっている。牛の横をせむしの老人が一人、葉のついた小枝を振って、牛にたかる虻[あぶ]や蠅を追いながら一緒に歩いてきた。---- 「ご苦労さん」と玩具で嬉しがっていた少年は一行に呼びかけた。そして、容子が急に主人に変わって使用人たちの精勤ぶりを賞めた。捕虜は相好を崩して笑いながら、見事な歯なみを見せた。老人は野生の梨の樹かげに牛を曳いて行き、煩[わずらわし]くたかってくる羽虫を猶も払いつづけている。少年は籠を運んできて、大きな緑色の壇を二三本取り出し、この地方ではマウルタッシェン(大きな口)といわれている杏[あんず]入りのとても美味しい菓子が一杯に入ったフライ・パンを二つ、これに添えた。イワンは少しドイツ語が判るので、一年前タルノポールで捕虜になったと私に告げることが出来た。私は紙入れから小さな暦を取り出し、大きな赤い復活祭の卵のついている頁を開いてイワンに与えた。すぐさまみんながまわりに寄ってきて、イワンと一緒にその小さな本に見入った。捕虜は、故郷の象徴を観て、私が期待したよりも強く心を動かした。ページをめくるその褐色の指は慄[ふる]えた。幾度も溜息をつく。それから彼は、周囲の人々に何事かロシア語で話しかけた。みんなはロシア語など一言も判りはしないのに、そうだそうだといわぬばかりに頷いてみせた。暦を進呈するという身をぶりて判らせて、彼の気をなだめようと思った。だがイワンは、右手で両眼を覆い、とめどもなく泣き始めた。居合わせた人々は下女も老婆もせむしの老爺も、みんな心配そうにイワンの顔を覗き込んだが、暫くするとみんなの頬にも涙の滴[しずく]が伝わり始めた。確かに各人各様それぞれの理由があって悲しんでいるのだろうが、中でも一番ひどく泣いたのは老人だった。彼はまるで自分を抑えようとしなかった。大声を挙げて泣きながら牛のところへ戻って行ったが、眼のまわりに黒い輪があって、虻に刺されて眼を赤くしているあめ色の牡牛さえも、一緒に泣いているように見えた。時代の悲しみのすべてが、今この哀れな人々をとらえたかのようにあった。彼等の涙はきらきらと光りながら黄色い切株の上に落ちた。少年だけはただ一人悠々としていた。彼は一座の人々に渦巻の恰好をしたいい匂いのする焼菓子をたっぷりと分配して、命令的に食べるようにすすめた。私も空手ではその場を立ち去れなかった。さっき貰わなかった李菓子の分までもすっかり取り返してしまった。せいぜい十二歳位になろうと思われるこの少年の本質を、心に刻み込もうとすればするほど、他日この少年が家や屋敷や田畑の主人になるだろうということは益々疑えなくなった。そう考えると、この物悲しい気づまりな一場の光景に、一抹の希望にみちた将来と力が漂ってくるように思われた。

大口焼[マウルタッシェン]をほおぼりながら道を進めて行くと、古いピルスティングの教会の、丸い時計版のある尖塔が私を見下して、遙か昔のことを思い出させた。子供が侵し得る罪の中でも一番重い罪の一つは、畑の中に足を入れることだった。身体がしびれてしまったり、雷に撃たれたりするのは、その罰のうちでもまだまだ軽い方で、そういう悪戯をした子供は、死んでから、以前誘惑したのと同じ悪魔が出てきて、その子供の髪を引摺んで地獄に引きずり込むのである。しかし禁断の果実は何となく食べてみたいものだ。一面に穂先を揃えた畑のわきを通る時には、よくその上で滅茶苦茶に暴れてみたいという強い誘惑に駆られたものであった。私が永い間遂にその誘惑の手に落ちないで済んだのは、一つには暗い眼でどこにいても私をつけまわしていた、あの木菟[みみずく]のような時計台の眼玉のお蔭だった。追憶に耽っている私の耳に、三時を知らせる時計の鐘が響いてきた。三十年以前と少しも変らぬ響きである。僅かな喜捨を沢山

集めて出来上ったあの大きな鐘は、してみるとまだやはり昔ながらの台の上にあって、無数の姉妹たちのように、大砲にされることもなく無事だったのだ。

人家を避けるようにして、市場の広場を歩いて行った。子供たちが遊んでいた。勿論私は一人としてその子供たちを知らないのだが、恐らくその顔だちからその子がどこの家の子であるかをはっきりと言い当てる事が出来ただろう、私達が昔住んでいた家も、その白壁はもう疾[と]うに汚れてしまっている。子供の時分落書をした壁には、戦況報告が貼りつけてあった。その内容は、これを読む人の心を、昔私が王様になったことを宣言した告知書ほどに明るくはしないらしい。人々は暗い不安な表情で立て去って行く、見覚えのある路地に、曾てはあれほどに素晴らしかった母の丹精の花園を求めた。庭は荒れ果て、草花もなく、垣根も朽ちていた。手入れの行届いている苗床や花壇の緑などはもう跡かたもなく、薔薇も夾竹桃も鳳仙花も、つまづらも、もうどんな美しい草花も一つだって咲いてはいなかった。小さな接骨木[にわたこ]や薊[あざみ]、いらくさなどが庭一杯にはびこっていた。そういう雑草は、昔私たちが懸命になって掻[むし]り取り、引き抜いた性の悪い草花の敵なのであった。母親が丹精こめて造り上げた清らかな色美しい花園全体は、丁度母その人と同じように、もう地中に消え失せていたのである。

後刻、沼地を抜けて停車場に通ずる国道を歩いて行くと、大きな鵲[かささぎ]が一羽斜めに舞い下ってくるのが目にとまった。地面から一匹のあしなし蜥蜴[とかげ]を爪にかけて、やっとのことで楊[やなぎ]の木株の上に舞い上った。跣[はだし]の女の子が、高く荷を積み上げた手押車を曳いて私の方にやってきた。女の子も鳥のすることを見ていた。車の柄を下におろして、鳥が獲物を嚙[の]み下すのを見守っている。

「あれはなんていう鳥？」と私が訊ねた。

「かささぎよ」と答えて、ああいうことは鵲には至極当り前のことなのだよと言った。蜥蜴などには全然同情していない。序のことに、彼女は、鵲の黒い羽根の数は白いのと同じだと教えてくれた。

「勘定してみたのかい？」彼女は面をあからめた。「いいえ、勘定はしないわ。だけどそうなの。お祖父さんがそう言ったのよ。」

車の積荷が一風変っていた。シルクハット拭きのような恰好の、茶色でフェルトみたいな蒲[がま]の穂ばかりだった。昔、これは宮廷の道化者のしるしだったので、「道化の笏[しゃく]」と呼ばれていた。これをよく村の教会などでは、辱めを受け荊の冠をかぶせられたキリストの像の手に持たせる。それから又、大抵の百姓家の部屋の中には、十字架のうしろに、供物の猫柳の枝の横にこれを立てておく。何に使うのだと聞けば、それをきれいにほぐして、もやもやした沢山の穂綿をこしらえ、枕の詰め物にするのだという。少女が集めたのは、選り抜きのきれいな穂ばかりで、濃い茶色で天鵲絨[びろうど]のように締まっている。ただ二つ三つ、藁[とう]が立ったものは、もうひとりではほぐれて、亜麻糸が糸捲き棒に下っているように、茎[くき]にぶらぶらと紡ぎ糸のように下っていた。女の子は、二つ三つ気前よく私に呉れた。金を取らなかったが、小さな板チョコレートをやると、大喜びだった。あの頃は、そんなものも全く珍しかった。私がもうずっと先きを歩いていた時、女の子がわざわざ後から追いかけてきて、さっきのままでは少なすぎるからと言って、とてもきれいな道化の笏を一束、私の腕に抱かせてくれた

「これで丁度枕一つ分」と少女は言った。

列車が着くまでには、まだ少し時間があったので、沼地の方をひと廻りした。沼の縁には、遅咲きの灯心草の茎が赤々と光っていた。黒い源五郎むしが水底で息をするために、明るい銀色の空気の真珠玉をもって水の中に沈んでいくのが見られた。木苺の繁みの奥からは、オレンジ色のほおづきが、日本の提灯のようにちらちらと覗いている。この物静かな、人に知られぬ風景のうちに浸っていると、以前フランスの戦線で幾度か出来上りそうになった詩句が、すらすらと纏まってきた。

ああ 時を忘れよ
汝の面 歪むことなく
面と共に 汝が心の曇らぬために。
汝が名を忘却せよ
鏡を覆い隠せ
汝 危難に挺身せよ！
現世にあつて一つの招きに応ずる者
唯一者のために多くを築く者
彼をこそ 星は刻々に形造る。
かくて 灼熱の歳月を経
汝の肉眼盲ふる時に
更に偉なる自然 熟しきたる。

解 説

この書物は、昭和 16 年に一度三笠書房からカロッサ全集の一巻として刊行された。今度養徳社からやはり全集中の一冊として出すことになり、前訳のあやまり若干を訂正し、処々で字句を改め、前訳では省略した部分をすべて加えた。(それは最後に近く主人公がある農家に往診する条[くだり]の、会話に続く部分である。)テキストは特に 1933 年版を参照した。それ以前の版で、ハインリヒ・ラウテンザックという詩人のことが出てくる章に「リルケを初めて識ったのは」云々とあるのが、この新しい版では本文中に見られるように「ヘルマン・エスヴァイン」と直してある。カロッサ自身の記憶の誤りであったのだろう。

その他気づいたことを二三誌すと、文中に「影響」という訳語が二三箇処出てくるが、原語は *Einwirkung* である。*Einfluss* とは多少ニュアンスを異にする。「現代におけるゲーテの影響」の「影響」もこの *Einwirkung* である。カロッサは普通使われる *Einfluss* の語を使わない。『幼年時代』や『青春変転』中の人物もむろん出てくる。それからのちに『成年の秘密』に至って充分に展開されることとなったモチーフ・水探しの榛[はしばみ]の小枝のことも出てくる。夢の話に火山島と戦士と緑の平野のことがしるされているが、『成年の秘密』を参照されたい。終り近くには「螺旋の路」という言葉が書かれているが、この語はエルンスト・ベルトラムのカロッサ論の基本的理念となっていることもいっておこう。

原題は *Führung und Geleit* であつて、*Führung* は「導き」「神の摂理」、*Geleit* は「伴侶」「つれ」「友」の意である。副題は *Ein Lebensgedenkbuch* (ある生の追憶の書物) という。十年以前、訳者がベルトラム教授の家でカロッサに会った時、日本語にはまずこの書物を訳すのがいいと彼はいつていた。手紙にもそう書いてよこした。

この書物の構成は、バッハの遁走曲、或いはモーツアルトあたりの、何かソナタのようである。物語はピルスティングの小さな町に始まり、同じくピルスティングに終る。カロッサの全作品もやはり全体がそんな組立てを持っているような気がする。

この小さい書物は、これを手取る限りの何人にも、かけがえのない貴重な財となるだろう。特に今日のような時代、ここには何と多くの慰めと光と勇気の泉とがあることだろう。未熟な訳文が、ここにある秘かな力を歪めることなく読者の許まで運んでくれればいいが。----

1949 年晩秋

高 橋 義 孝